PAPUA NEWGUINEA

パプアニューギニアガイドブック

刊行にあたって

本ガイドブックは、太平洋諸島センター（PIC）が管轄する太平洋島嶼国14カ国のうち、パプアニューギニアに関する観光情報をできるだけ詳しく取りまとめたものです。また、同国についてより理解を深めていただくために観光情報以外にも、歴史、政治、経済、社会、文化等についても簡潔に説明を加えています。

本資料で取り上げたパプアニューギニアは、経済的には、太平洋島嶼国の中で最も規模の大きい国であり、近年は観光開発についても力をいれており、魅力的なダイビング・スポットや野生生物の宝庫である熱帯雨林を求め、日本からの訪問者数も増えております。本書がパプアニューギニアを訪問される際の参考となり、また同国への理解を深めて頂くための一助となれば幸いです。

なお、本改訂版の作成に多大なる協力をいただきました㈲ピーエヌジージャパン 山辺様、PNG Japan Ltd.（パプアニューギニア）上岡様、見形様、奥野様に深く感謝いたします。

2020年8月

国際機関 太平洋諸島センター

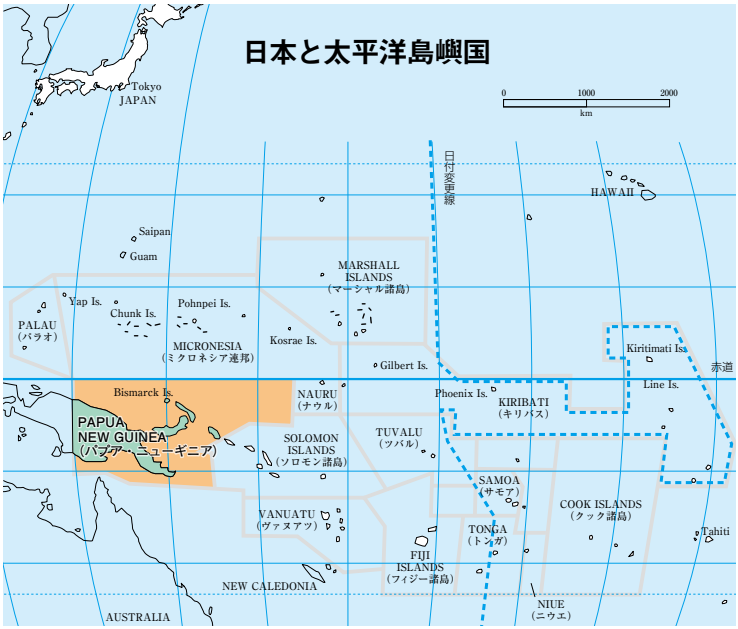
＊国際機関太平洋諸島センター（PIC）は、ホームページ（https://pic.or.jp/）でも情報を公開していますので、合わせてご参照ください。

目　次

パプアニューギニア概要 …… 3
トラベルガイド …… 9
ニューギニア島南東地域
　首都行政区ポートモレスビー …… 25
　ミルンベイ州 …… 37
　オロ州 …… 42
　ウエスタン州 …… 45
ニューギニア島北西地域
　モロベ州 …… 48
　マダン州 …… 54
　東セピック州 …… 59
　サンダウン州 …… 65
ニューギニア島山岳地域
　西ハイランド州とジワカ州 …… 68
　東ハイランド州 …… 73
　ヘラ州 …… 81
島しょ地域
　ニューブリテン島 西ニューブリテン州 …… 84
　ニューブリテン島 東ニューブリテン州 …… 89
　ニューアイルランド島 ニューアイルランド州 …… 99
　マヌス島 マヌス州 …… 103
　ブーゲンビル島 ブーゲンビル自治州 …… 106

パプアニューギニア

正式国名	パプアニューギニア独立国（Independent States of Papua New Guinea）
面積	46.2万平方キロメートル（日本の約1.25倍）
人口	861万人（2018年世界銀行）
首都	ポートモレスビー（Port Moresby）
民族	メラネシア系
主要言語	英語（公用語）、ピジン語、モツ語等
宗教	キリスト教、その他、祖先崇拝などの伝統信仰も強く残っている。
政体	立憲君主制
1人当りGNI	2,530米ドル（2018年世界銀行）
通貨	キナおよびトヤ
電話の国番号	（675）＋（相手先の番号）



パプアニューギニアの概要

赤道の直ぐ南、オーストラリアの北には巨大なニューギニア島とその周辺に約1000を超える島々がある。ニューギニア島の東半分が最後の秘境といわれるパプアニューギニアであり、西半分はインドネシアに属するイリアンジャヤ。大小600もの島からなるパプアニューギニアは、総面積約46万㎢で日本の約1.25倍、人口は約860万人でパプア人やニューギニア人、高地族を中心に多くの部族で構成されている。言語の数も多く、実に800にも及ぶ異なった言語が話されているという。

国名のパプアニューギニアは、1526年に上陸したポルトガル人が「パプア」と名付け、その後に上陸したスペイン人が「ニュー･ギニア」と名付けたことに始まる。パプアはマレー語の「縮れ毛」を意味し、ニュー・ギニアはアフリカの「ギニア」に似ているからと伝えられている。首都はポートモレスビーでニューギニア島の東に突き出た半島の南にあり、人口約30万人の近代的な都市である。また、日本人によく知られているラバウルは、ニューギニア島の東に位置するニューブリテン島の最北端にある。

歴　史

●先史時代

ニューギニア島に人々が移動してきたのは5万年前の氷河期時代に遡る。スマトラからインドネシアの島伝いに、あるいはカリマンタン島を経由して移住してきた人々が、ニューギニア全土に定住するようになったのは紀元前8000年ごろからと云われている。当時はオーストラリアと陸で繋がっており、さらに南下して行った人々がアボリジニと呼ばれるようになった。

紀元前9000年頃、ニューギニア島の高地に住む人々は既にサゴヤシの実、パンの木、バナナ、ヤムイモ、サトウキビなどを植えていたらしい。

●ヨーロッパとの接触

記録では、最初にニューギニア島に上陸したヨーロッパ人はポルトガル人のメネセスで、1526年となっている。上陸したのはニューギニア島の北西部の龍の頭の形をした半島である。ヨーロッパからの本格的な進出は大航海時代を迎える16世紀からで、1545年にスペイン政府が統治宣言を行った。しかし、この宣言は形式的なもので実際には統合されず、1660年にはオランダ東インド会社が島の一部を占有した。

●植民地の時代

19世紀に入るとヨーロッパによる植民地化競争が激しくなり、1824年には英国とオランダが西側の覇権を巡って衝突、1828年に英国の撤退で一時的な解決を見た。1882年、ドイツが積極的な植民地政策を進めたことに英国が反発し、オランダを含めた3国間での調整が図られた。その結果、1884年9月、ニューギニア島の3分割が決定した。西地区はオランダ、南東部は英国、そして北東部は最初に領有を主張したドイツの権利が認められた。東西の分割は、この時点でヨーロッパ人が進出していない山間部で線引きがなされた。

北東部の占有を主張したドイツは、その後15年間この地で植民地経営を行ったが、経営は失敗に終わり、1899年にニューギニア島の東に浮かぶビスマルク諸島へと拠点を移した。一方、英国は、1888年総督となったマグレガー卿が警察組織を創設するなど安定した植民地経営を行った。1906年、英国の植民地はオーストラリア政府に引き継がれ、オーストラリア領パプアとなった。

●第1次世界大戦

1914年、第1次世界大戦の勃発により、英国はオーストラリアに対しニューギニアのドイツ領への占領を要請し、同年9月、オーストラリア軍はニューブリテン島のドイツ軍司令部を占拠したが、ドイツ領を完全に掌握するまでにはなお、6ヶ月を要した。

1920年、国際連盟はドイツ領ニューギニアの統治をオーストラリアに委任した。これによりニューギニア島の東半分は正式にオーストラリア領パプアニューギニアとなり、積極的な開拓が行われることになった。1927年から30年に掛けて、オラン

ダ領との境を源流としてニューギニア島の北へ流れるセピック川と南のパプア湾に下るフライ川を結ぶ全流域の調査や、過去の入植者が手を付けなかったハイランド地方への探検隊の派遣などが行われた。金鉱脈の発見もこの年代だった。しかし一方では、新しい入植者とニューギニア人との間で労働条件を巡る緊張が高まり、1929年には大規模なストライキが発生している。

●第2次世界大戦

1941年12月、日本軍が真珠湾を攻撃した時点では、オーストラリアは英国と共に北アフリカやヨーロッパで2年にわたってドイツ軍と戦っていた。日本軍はその虚を突いてニューギニアからソロモン諸島へと戦線を拡大し、1942年1月23日にはラバウルを占領、ここを拠点にニューギニア島のレイ（ラエ）、サラモアに上陸した。日本軍は、ココダトレイルの難所を突破してポートモレスビーの僅か50㎞まで侵攻したが、オーストラリアとアメリカの連合軍の激しい反撃を受け撃退され、この敗戦を機に苦難の撤退が始まった。

1943年9月、連合軍は激戦の末にラエを奪回、日本軍はウェワクまで追い詰められた。ニューギニア島での戦闘は1945年までにほとんど終結していたが、ニューブリテン島やニューアイルランド島での戦闘は無条件降伏による武装解除まで日本軍の散発的な抵抗が続いた。

パプアニューギニアの7月23日の戦没者追悼記念日は、1942年の日本軍の侵略に立ち向かったパプアニューギニアの歩兵大隊の戦闘を記念したものである。

●終戦から独立まで

この大戦を契機に、ニューギニアの人々はオーストラリアの植民地政策に疑問を持つようになり、不満は次第に大きくなっていった。また、世界的にも植民地支配への反発が強まったことから、1962年に国際連合はオーストラリアとオランダに対してニューギニアの独立を支援するよう要請した。そのポイントは、国語力の強化を中心とした国民全体のレベルアップと徹底的なエリート教育を同時に行うことによって自治政府の発足を早めることだった。結果として、1963年にはオランダ領の西半分がインドネシア領イリアンジャヤとして独立、1964年には東半分のオーストラリア領では64人の議員による初の議会が開かれた。

1973年に自治政府が発足、1975年3月には外交と国防をオーストラリアから譲り受け、同年9月16日にパプアニューギニアとして完全な独立を達成した。

政治と経済

●政治動向

パプアニューギニアでは1975年に独立して以来ソマレ政権が5年ほど続いた後、小党が乱立して連立政権が続いている。ブーゲンビル島では、1988年にブーゲンビル銅山に関する地主の土地賠償要求に端を発した紛争が、その後ブーゲンビルの分離独立運動にまで発展し、89年には非常

事態宣言が出された。紛争は長期化したが、1999年7月に人民民主運動党のサー・メケレ・モラウタ党首を首相とする政権交代があり、最大の懸案であるブーゲンビル問題についてニュージーランドの仲介で和平協議が開始された。

2001年8月に中央政府と分離独立派との間で、(a)ブーゲンビル自治政府の創設、(b)ブーゲンビルの将来の政治的立場についての国民投票権の創設、(c)武器撤収計画の3つを柱とする「ブーゲンビル和平合意」が署名された。

パプアニューギニア政府は、南太平洋諸国との協力関係の重視と、オーストラリアとの関係重視、インドネシアとの善隣関係重視、さらには、ASEANとの関係強化及び日・米等との貿易・投資関係を重視している。

●経済動向

パプアニューギニアは豊富な天然資源（液化天然ガス、原油、金、銅、コバルト、木材、水産物、パーム油など）に恵まれ、輸出所得の70%を鉱物資源の輸出が占めている。2003年以降は金、原油、銅などの鉱物資源、コーヒーやココアなどの農水産物の好調な輸出、国際商品価格の高騰、順調な気候条件、安定した政権、財政金融政策の引き締め、貿易政策の改善により経済はプラス成長を続けており、今後も暫くこの傾向が続くものと見られている。最近は観光資源の開発に力を入れており、輸送や旅行者用諸施設などのインフラ整備への投資が活発化している。

一方、85%の国民は自給自足の農業および漁業に依存しているが、都市部の貨幣経済と村落部の自給自足経済が混在する二重構造となっている。現在の人口は約860万人であるが、その失業率は地域により2%～3%である。

同国は、基本的な不安定要因として、予測できない天候の変化、原油、農産品などの国際商品価格の不安定さ、ガス・パイプライン・プロジェクトを含む大規模開発案件の推進などを抱え、地理的条件により莫大なコストを要するインフラ整備、極端に低い人口密度、複雑な土地所有制度、深刻な治安問題、遅々として進まない人材開発などがあげられる。

2011年から約8年に渡り国を率いてきたオニール首相は2019年、同首相に不満を持つ閣僚を含む国会議員の与党からの離脱や内閣不信任案の提出等により、内政状況が不安定化。同年5月下旬、更に多くの国会議員が与党を離脱したことを受け、オニール首相が辞任を表明。首相選出の投票が行われ、マラペ前金融相が首相に選出された。新政権は今後も公共部門の改革をはじめとする各種政策の着実な実施により、海外投資家の信頼を醸成し経済の安定と成長を図らなければならないという難しい政策運営を迫られている。

地理と地勢

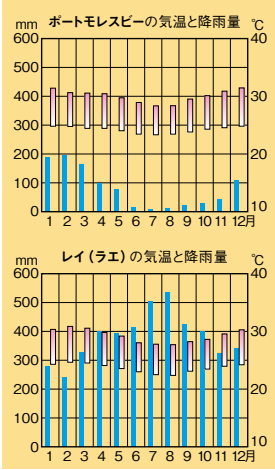
オーストラリアの北160㎞、赤道の直

ぐ南に位置し、ニューギニア島の東半分とニューブリテン島、ニューアイルランド島、ブーゲンビル島など大小600を超える島々からなる。ニューギニア島の西にはインドネシア群島、東にはメラネシアの島々があり、地理的にも文化的にも両方の影響を強く受けている。

ニューギニア島の高地は谷が深く険しい。イリアンジャヤとの国境近くの鉱山から東に蛇行して流れる全長1126㎞のセピック川は、中流域では広大な湿地帯となる。雨量が多いと氾濫し、河川流域は常に水害の危険にさらされている。本島の中央部を北西からマン島にかけて山脈が続き、最高峰はウィルヘルム山の4509m、ポートモレスビーの北には4038mのビクトリア山がある。火山の活動も活発であり、1994年9月19日にニューブリテン島のラバウルにあるタヴルヴル山とヴァルカン山、21日にラバラナカイア山が噴火し、ラバウル旧市街は火山灰に埋まり壊滅状態になった。現在、ラバウル旧市街に代わる新しい市街がココポに作られ、空港もココポ郊外のトクアに移っている。

気　候

一部の山岳地帯を除き、国土のほとんどが熱帯気候でモンスーンの影響下にあり、年中高温で多雨となっている。ほとんどの場所で5月から10月が乾季で、11月から4月が雨季となる。ただ、パプア湾に面したガルフ州は世界的にも知られる多雨地域で、年間の降雨量は8000㎜にも達し、特に雨の多いのは5月から10月。また、ソロモン海に面したレイからアロタウにかけては4月から9月が雨季となる。



首都のポートモレスビーは、年間降雨量が1000㎜ほどと少なく、4月から11月は乾燥して埃っぽい毎日が続く。一方、レイは4500㎜を超え、ウェスト・ニュー・ブリテン州では6000㎜を超えるところもある。気温は年間を通して大きな変化は少なく、平均気温はポートモレスビーやレイで27℃、中央高地（ハイランド地方）では18℃、夜は10℃くらいまで下がることもある。

社会と人々

パプアニューギニアは21の州と首都区で構成されている。2018年、世界銀行の統計では総人口約860万人となっており、内約37万人が首都ポートモレスビーに居住している。

パプアニューギニア人は歴史的に見ても多くの混血を繰り返し、数多くの部族に分かれたと考えられている。これは植民地時代の住居の強制的な移動などにも影響されている。文化や歴史的な関連性からは、南に多いパプア人、北に多いニューギニア人、そして高地人と島に住む島人に分かれる。また、体型あるいは肌の色によっても分けることが出来る。

●メラネシア社会

多数の部族に分かれていても、いずれもメラネシア人であり共通点を有している。パプアニューギニアの発展の速度は速くなっているが、それでも大半の人々は農業による自足自給の生活である。従って、伝統的社会がそのまま残っており、社会の最も重要な基盤は部族である。若者は年配者のために働き、家族は一族のため、一族は部族のために結束する。

貨幣経済が次第に広がっている一方で、中央高地やセピック川の中、上流域では従来からのシェルマネー(真珠貝などの貨幣)や豚のほうが依然として価値があったりする。現在でも一部地域ではシェル・マネーが使われており、他には冠婚葬祭での贈り物として重要な意味を持っている。

●ワントク（Wantok）

パプアニューギニアには、人々の間に「ワントク」と呼ばれる仲間意識（義理のようなもの）がある。「ワントク」（Wantok）は、文字通りには「ワン・トーク」（One talk）または「同じ言葉」を意味するが、さらに「同じ家族」、「同じ部族」と言う意味が加味される。誰かに助けてもらった場合は、自分が損をすることになっても相手を助ける義務を負う。この意識が、資本主義的もしくは西洋的な生活様式、ビジネス様式に組み合わされた場合、問題が生ずる原因になることがある。

教　育

パプアニューギニアの教育制度は、基礎学校3年（日本における幼稚園年長～小学校2年生）、初等学校6年（同小学校3年生～中学校2年生）、中等学校4年（同中学校3年生～高校3年生）、大学4年となっている。また、現在は政府の方針により、公立校は中等学校まで、教育費が無料となっている。

宗　教

パプアニューギニアは憲法でクリスチャンの国であると宣言している。カトリック教徒が約28%、ルター派が約23%、ユナイテッド教会が約13%で、その他は英国国教会など広い宗派に属している。一方で依然として伝統的な宗教や精霊が信仰されている。

言　語

パプアニューギニアで使われる言語は大きく分けて500、細かく分けると800語を数える。公用語が英語で、ピジン語とモツ語が共通語となる。ピジン語とは英語と現地語が混じったものの総称であり、従って隣国のソロモンやバヌアツで使われるピジン語と共通点は多いが同じではない。

同じ発音を繰返す単語が多いことがピジン語の特徴だ。例えば、「話す」は「トクトク」、「食べる」は「カイカイ」、「花」は「ナタナタ」、「ワニ」は「プクプク」、「小さい」あるいは「少し」は「リクリク」で、「もっと小さい」は「リクリクモア」など、素朴でどこか楽しい。しかし、英語と似ていても意味が全く違う単語もあるので注意したい。

ピジン語を覚えよう

おはよう。	モーニン（Monin）
こんにちは。	アピヌン（Apinun）
こんばんは。	グッナイト（Gutnait）
ありがとう。	テンキュー（Tenkyu）
ごめんなさい。	ソーリートゥルー（Sori tru）
お元気ですか。	ユーオーライ？（Yu orait?）
私は元気です。	ミオーライ（Mi orait）
じゃまたね。	ルッキム　ユー（Lukim yu）
さよなら。	グッバイ（Gutbai）
写真を撮ってもいいですか？	イナップミキッシムサンペラピクサ？（Inap mi kisim sampela piksa?）
何？	ワネム？（Wanem?）
いつ？	ワネムタイム？（Wanem taim?）
どこ？	ウェー？（We?）
だれ？	フサット？（Husat?）
なぜ？	ビロング　ワネム？（Bilong wanem?）
いくら？	ハマス？（Hamas?）

パプアニューギニアのトラベル・ガイド

●日本からのアクセス

2002年より運航していたニューギニア航空の成田⇔ポートモレスビー定期便は現在、運休中（2020年６月現在）で、経由便ではフィリピン航空がマニラ⇔ポートモレスビー間を週4便運航しており、東京や大阪などからのマニラ便と接続している。その他オーストラリアのケアンズやブリスベン、シンガポール、香港を経由するルートがある。

●パスポートとビザ

パプアニューギニアへの入国に当っては、ビザの取得が必要である。60日以内の観光目的であれば、ポートモレスビーのジャクソン国際空港でも簡単に入手できる

PNGの空の玄関ポートモレスビー空港

（2020年6月現在、無料）が、入国審査における待ち時間が長いことがしばしばあるため、乗継ぎ便がある時には十分な時間的余裕が必要とされる場合もあり、スムーズな入国、また団体の場合には事前にビザ取得したほうが良い。なお業務渡航は必ず事前にビザ取得が必要。ビザは在日本パプアニューギニア大使館で取得できる。必要な書類など詳しくは大使館ホームページ http://png.or.jp/　を参照。

※在日本パプアニューギニア大使館：
東京都目黒区下目黒5-32-20
電話03（3710）7001
Email: png.tokyo@png.or.jp

●入国審査と出国手続き

入国には税関申告書を兼ねた入国カードが必要である。短期渡航の入国審査は質問もほとんどなく簡単だが、税関、特に食品の持ち込みは厳しい。また、高価な電化製品などは1年以上使用している場合は問題ないが、新しいものは課税される場合があるので、購入金額を証明する領収書を忘れずに持参したい。タバコは紙巻で250本、アルコールは2リットル、少量の香水の持ち込みは無税である。

また税関職員による不正な賄賂を要求する事件が多発している。不審に思った場合は毅然とした態度で対応し、税金の支払いをする場合には、必ず領収書の発行を請求することが肝要。

出国時に根付きの蘭や1970年以前に作られた民芸品を持ち出すことは禁止されており、違反者に対しては厳しい罰則が設けられている。また蝶など野生動植物・昆虫類の標本にはワシントン条約（CITES）で輸出入が禁止されているものがあるので注意したい。

●時差

パプアニューギニア標準時間は日本より1時間進んでおり、日本が正午の時、現地は午後1時となる。但しブーゲンビル自治州ではブーゲンビル標準時間が採用されており、パプアニューギニア標準時より1時間早く、日本より2時間早くなっている。

●通貨と両替

パプアニューギニアの通貨はキナ（Kina：真珠貝を意味する）とトヤ（Toea：小さな貝を意味する）があり、1キナ＝ 100トヤ。紙幣は100、50、20、10、5、2キナがあり、硬貨は1キナ、50、20、10、5トヤがある。各紙幣には伝統的社会における財産・通貨である石斧、シェルマネー、豚などがデザインされている。

日本円は空港や市中の銀行、両替所、ホテルで両替できるが、ホテルはレートが悪い上、治安上の懸念から大量の現金を保有し

ていない為、到着時にジャクソン空港内の両替所で必要額を両替し、ホテルなどの支払いはクレジットカードで行い、さらに換金が必要な場合は、米ドルまたは豪ドルの現金を用意しておくと良い。また空港やホテルに設置されたATMを利用してクレジットカードからキナのキャッシングを行うことも出来る。なお帰国時に使い残したキナを、ジャクソン空港の銀行両替窓口で外貨に両替するのを忘れずに。ただし円貨は十分な額が無い場合があるが米ドルは1ドル単位から再両替が可能。

現地で日本円の現金からキナへの為替レートは1キナ＝約38円（2020年5月26日現在）。

●物品サービス税（GST）

パプアニューギニア国内での買い物には10%の物品サービス税（消費税）がかかる。

スーパーなど小売店では内税となって表示価格に含まれていることが殆どだが、見積もりなどは外税表示となる事もあるので、購入の前に税込みかどうかを確認する方がよい。 なお国際線航空運賃は非課税である。

●現金とクレジットカード

日常生活で多く使われるのは少額貨幣で、特に地方農村部では20キナ紙幣以上はあまり使われない。

ホテルや高級レストラン、大型スーパー以外ではつり銭も用意されていない場合も多いので、少額の貨幣を併せて持ち歩く方がよい。クレジットカードは、ホテル、高級レストラン、主要空港、旅行代理店、大手スーパーなどで利用できる。ビザ（Visa）、マスターカード（MasterCard）が主流で、アメリカンエクスプレス（Amex）は使えないことが多い。また地方ではカードが使える施設でもネットワークの問題で使えない事もあるので、万が一のために一定額を支払える現金を保有しておくべきである。

●チップ事情

チップの習慣はない。何かしてもらったら感謝の意味で「テンキュー（Tenkyu）」（ピジン語）と応えよう。

ただし、特別に用事を頼んだ場合は、さりげなく少額の謝礼（5 ～ 10キナ程度）を渡すのが良い。

●郵便と電話

郵便のシステムは日本と異なり配達の制度が無いため、現地に届いた郵便物は全て郵便局にある私書箱（P.O.Box）に投函される。旅行者は滞在しているホテルか最寄りの郵便局気付で手紙を受け取れる。また日本までの航空郵便は通常郵便（葉書サイズ）で、50gまでが6.9キナで、ポートモレスビーから約2週間かかる。

携帯電話ネットワークはデジセル、Bモバイル、テリコムの３社で、都市部では全てのネットワークが通話可能だが、地方では電波のカバー地域に会社による差があり、全国に携帯電話基地局が多いデジセル社のネットワークが圧倒的に広い電波カ

バー範囲を有する。なお現在では日本の大手携帯電話会社は何れかの会社とローミングサービス契約を交わしており、そのまま通話できることが多い。

パプアニューギニアの電話から日本へのかけ方は00−81（日本の国番号）−3（市外局番から0をとった番号：3は東京）−○○○○−○○○○、料金は携帯電話で1分1.75キナ、固定電話で1分2キナ。なお日本からパプアニューギニアへ電話する場合の国番号は675。

●インターネット

インターネットの接続料金は高く、速度は遅く、頻繁にネットワークが落ちる。

近年ポートモレスビーや主要都市のホテルでも宿泊者に対して有料・無料のWi-Fiサービスを開始している。但しWi-Fiサービスを行っていないホテルもまだ多くある。

日本の携帯電話回線を海外でそのまま使用すると、契約しているパプアニューギニアの携帯会社に自動ローミングされ、パケット通信料が高額となる可能性があるので注意が必要。パプアニューギニアではフリースポットはほとんどないので、あらかじめ海外パケット定額サービスやレンタルルーターを借りていくなどして安価なモバイルデータ通信（ネットサービス）の確保をしておくか、ポートモレスビーの空港で到着時に現地携帯電話会社のSIMやルーターを購入するなどしてネット接続を確保する必要がある。

ポートモレスビー到着ロビーにある携帯電話カウンター

ネット料金のプランは随時変動するのであくまで参考だが、2020年6月現在のデジセル社のプリペードプランは以下の通り。

1日間有効400MB　7キナ
7日間有効1GB　30キナ
30日間有効4GB　100キナ
30日間有効8GB　200キナ

●旅行者向け食事と水事情

ポートモレスビーでは、中華、韓国、和食、イタリアンなど各種レストランがあり、オーナーの多くが本場の国の出身なので美味しい。一方、多くの地方都市では昼間のみ営業のカイバー（ローカル料理のファストフード店）以外、外食産業がほとんどないので、旅行者が食事を取る場所はほぼホ

ポートモレスビーの中華レストラン

観光ツアーでだされるローカル料理ムームー

テルに限られる。

海岸部のホテルではシーフードメニューが多いといった地産地消傾向があり、調理スタイルは豪州風の洋食中心で、またローカル料理や中華などの料理をだすホテルも一部にある。

ローカル料理を食べるには現地の人に頼む他、観光ツアーで村でのランチとして食べることが出来る場合もある。

また先進国で進むビーガン、ハラル、グルテンフリー、各アレルギー対応の食事メニュー提供は遅れており、対応できるのはポートモレスビーの大型ホテルと外国人の受入れが多いダイビング可能なリゾート・ホテルの一部に限られ、全国的には殆ど不可なので注意が必要。

パプアニューギニアの水道はWHOの安全基準をクリアしており、安全とされているが、ホテルの水も沸騰して飲むかミネラルウォーターを購入した方が安全。氷は水道水で作られるので胃腸の強くない人は避けたほうが良い。町にはスーパーマーケットもあり食材は豊富にそろっている。なお青空市場では野菜や果物のみ浄化した水でよく洗ってから食べ、肉・海産物は鮮度と保存状態がわからない場合には避けた方がよい。

●電圧と電源

240ボルト、50ヘルツで、プラグは一般に「Oタイプ」と呼ばれる「ハの字」二股形、3つ穴式でオーストラリアやニュージーランドと同じ。主要都市を除いて電気の普及が遅れており、朝夕の数時間だけ送電される地方都市もまだ多い。日本の電化製品を使用する場合、現在では自動電圧切替式（110V ～ 240V対応）の製品も多いので、日本出発前に確認し、必要に応じて変圧器を用意すること。

●治安

パプアニューギニアの国民の大半は人懐っこく優しいが、一般的に都市部の治安状況は悪いと考えたほうが良い。近年、経済発展による貧富の差の拡大により、金品目当ての窃盗、強盗をはじめスリ、置き引きが多発しており、十分な注意が必要だ。ポートモレスビーなど都市部では貧困層の若者が中心となって武装して徒党を組み「ラスカル（Rascal)」と呼ばれる強盗団となり、車を強奪したり商店や家屋を襲い、時に銀行強盗を働く事もある。

ポートモレスビーでは徒歩での外出は厳禁で、ホテルや空港周辺も外国人を待ち伏せしていることがあるので、近くでも徒歩での外出は避けた方がよい。タクシーや乗り合いバス（ＰＭＶ）も利用しない方がよく、運転手付きのハイヤーを手配するのが

最も安全。

地方都市やその他の町でも外出する時は、目立たぬ服装（特に女性は露出の多い服装は控える）で夜間や日中の単独行動、バス停など人の多いところ、人影の少ないところ、午後のマーケットやPMVバスの利用を避け、また出来るだけ現地人（ガイドなど）と行動を共にする。常に周囲を確認し､怪しい場所や人には近づかないこと。危険地帯に近づくと、地元の人が教えてくれることもある。貴重品（現金、スマートフォン、カメラなど）を他人に見られないようにし、多額の現金を持ち歩かず、ウエストバッグの使用を避ける。バック類は必ずカギのかかるものを選び、常に手元においておくことが必要だ。また道路標識などが不正確で、道路陥没などが多くあるので短期渡航者が自分で運転する事は勧められない。ホテル所有の車など信頼できる車とドライバーを手配するのが安全。

●予防接種とマラリアについて

日本から直接入国する場合、原則として予防接種は必要ない。但し日本の厚生労働省ではパプアニューギニアの標高1800m以下の全土をマラリアの汚染地域として警戒を呼び掛けている。マラリアはハマダラ属の蚊が媒介する伝染病で1週間から4週間ほどの潜伏期間をおいて、発熱、寒気、頭痛、嘔吐、関節痛、筋肉痛などの症状が出ます。標高1800m以下でも蚊の生息域が後退したポートモレスビーなど都市部ではほとんど見られなくなったがセピック川流域を始めとする低湿地帯や熱帯ジャングルでは特に注意が必要である。現在は予防薬や特効薬 があり、早期に適切な処置をすれば問題ないが、一度感染すると再発の可能性があるので油断は出来ない。

マラリアの予防などについては厚生労働省の情報を参照：
https://www.forth.go.jp/useful/malaria.html

●服装・装備

一般的に低地、海岸部では一年中夏服でもよい。一方ハイランド地方へ旅行する場合はかなりの気温差があるので注意したい。昼間は気温が高く日差しが強いため、熱射病予防のため帽子、サングラス、日焼け止めクリーム、ミネラルウォーターが必

寒く感じることもあるハイランド地方

セピック川など低地やブッシュでは長袖やズボンがよい

要な一方、夜は気温が下がるので軽い防寒服を用意するとよい。またセピック川流域やブッシュ（草むら）では、マラリア予防のため長袖、長ズボンが必要だ。雨季（多くの地域では11～4月）には激しいスコールがあり、薄いレインコートや折畳傘も便利。その他ティッシュ、ウェットティッシュがあると便利。常備薬は忘れずに。現地調達は困難だ。

●薬物のこと

パプアニューギニアでは、ヤシの仲間であるビンロウ樹の実（ビートルナッツ）を口に入れてチューインガムのように噛む習慣がある。ビートルナッツは台湾から東南アジア、南太平洋に広がる嗜好品でパプアニューギニアでは「ブアイ（buai）」と呼ばれ、元々は儀式の時だけ使われるものだったが、その覚醒作用から常習化し、子供のうちから口をクチャクチャさせ、口の中を真っ赤にしている。

ハイランド地方ではマリファナが自生していることが多く、路上で販売される事もあるが、旅行者がこれを入手すると犯罪となるので注意したい。タバコの栽培も行っている。これも重要な換金作物であり、地元で加工された葉巻状のものや新聞紙で巻いたものがマーケットで売られている。

道端で売られているビートルナッツ

●現地人との交流

伝統的にアルコールが存在しない社会だった事から、パプアニューギニア人にはアルコールを分解する酵素が備わっていないと言われ、お酒に極端に弱い。お酒を飲むと性格が変わってしまう事があり、温和な人が少しの飲酒で暴力沙汰を起こすことも多々あり、週末の朝は飲酒運転で自爆した車を頻繁に見かけるほど。日本的な感覚で「ちょっと一杯」が大きな問題になる事もあるので、現地の方との交流は昼間でお酒を抜きにした食事にするなど、配慮したほうがよい。なおホテル、レストランなど指定された場所以外での飲酒は法律で禁止されている。

●メディア

新聞は、「Post Courier（英語）」、「The National（英語）」、「Wantok（ピジン語）」がある。TVは、ローカル局では「エムティービー（EM TV）」「NBC」、TV WANなどの数局があり、その他、ケーブルテレビでCNNやBBC、NHK海外放送などのニュースや映画専門チャンネル、スポーツ専門チャンネルなど含め、購入プランにより80局ほどの外国放送が見られる。

全国的にはテレビやインターネットの普及が低い中、ラジオが情報伝達の中心となっている。AMでは国営放送のNBC、FMでは民間でNAUFM、FM93、

FM96、FM100など、また民間FMラジオ局がセントラル、ミルンベイ、モロベ、東ニューブリテンなどの各州で開局してローカルの情報元となっている。

●祝祭日

2020年の祝祭日は次の通り。

・1月1日：ニュー・イヤーズ・デー（新年：New Years Day）
・4月10日：グッド・フライデー（聖金曜日：Good Friday）
・4月11日：イースター・サタデー（Easter Saturday）
・4月13日：イースター・マンデー（Easter Monday）
・6月8日：クイーンズ・バースデー（女王陛下誕生日：Queen's Birthday）
・7月23日：ナショナル・リメンバランス・デー（国家追悼記念日：National Remembrance Day）
・8月23日：ナショナル・レペンタンス・デー（国家改悛日：National Repentance Day）
・9月16日：インディペンデンス・デー(独立記念日：Independence Day）
・12月25日：クリスマス（Christmas Day）
・12月26日：ボクシング・デー（Boxing Day）

パプアニューギニアの交通事情

広大なジャングルや広大な河川、低湿地帯、4000mを越える山脈がニューギニア島を横断しているため、道路整備は進んでいない。

主要幹線道路としてはレイ（ラエ）からゴロカマウントハーゲンを経てポルゲラ金鉱山に至るハイランド･ハイウェイがあり、近年には西ニューブリテンと東ニューブリテンを繋ぐニューブリテン・ハイウェイが開通した。しかし南側に位置する首都 ポートモレスビーと北側にある第2の都市レイ（ラエ）を結ぶ道路もなく、国内移動は航空機が中心である。

旅行者が国内を移動する場合は、長距離は定期航空便、都市の周辺は運転手付のレンタカー、奥地・僻地には小型チャーター飛行機を利用する。

●航空便

海外の主要都市を結んでいるのはニューギニア航空（Air Niugini)、カンタス航空とフィリピン航空で、国内便は、ニューギニア航空、PNGエアの２社が全国規模の

ニューギニア航空

定期便を持ち、その他トロピックエアー、ヘビーリフト、ノース･コースト･アビエーション、MAFなどの航空会社がそれぞれ地方限定の定期便やチャーター便を運行している。

主要都市には必ず空港があり、奥地や僻地にも滑走路を備えた村があるなど、パプアニューギニアの航空路線網は充実しているが、運航スケジュール、便数、路線の変更が多いので利用には注意が必要。また利用器材が小さくオーバーブックが多いので、予約とリコンファームを確実に行い、早めにチェックインすることが重要。

●PMVs（Public Motor Vehicles）

PMVsは、国内をくまなく走っている身近な公共バス。市内循環、中距離、長距離の3種類があり、バスには日本製のミニバンやマイクロバスと、トラックを改造して木の長椅子を付けたものがある。市内を走るバスは、客が降りたいところが停留所で、乗る場合には手を振ると停まってくれる。バスには立ち席は無く、満席の場合は乗ることが出来ない。料金は乗車後にドアの近くに座っている車掌に払う。中・長距離バスはマーケットから出発する。長距離バスはほとんどが早朝に出発するが、満席になるまで発車しないので、場合によっては2時間も車内で待たされることもある。PMVsは運行路線が複雑で、路線図もなく、治安も悪いので旅行者は知り合いの現地人と乗車する以外、利用を避けたほうが良い。

●タクシーとレンタカー

タクシーは、ポートモレスビーなど一部の都市を除きほとんど走っておらず、あってもメーターが無い車が殆どで事前に料金を交渉する必要があり、旅行者には勧められない。

レンタカーはエイビス（Avis)､バジェット（Budget)、スリフティー（Thrifty)、ハーツ（Hertz）が主要都市で営業している。車の多くがマニュアル車である。現地事情に精通した地元の人と一緒であれば利用は問題ないが､道路の舗装状況は劣悪で、雨が降ると冠水することもあり、また車両の盗難、車上荒らし、路上で停車した際に強盗に狙われるなど治安の悪さもあり、旅行者だけで利用するのはやはり勧められない。

アクティビティ

大自然に包まれた神秘の国パプアニューギニアへの個人旅行は、まだまだ一般化していないが、目的を持ったグループ旅行は増えている。最近はダイビングやサーフィンなどのマリンスポーツ、自然観察、民族探訪、トレッキングなどを目的としたツアーが企画されている。特に、ラバウルのマスク・フェスティバル(7月)、マウントハーゲン･ショー（8月)､ゴロカ･ショー（9月）など各都市部で年に１度開催されるシンシン・ショー（様々な民族が集い民族舞踏を披露するフェスティバル）には、世界各地から観光客が集まる。この時は宿泊施

ゴロカショー

設等の予約が混雑するのでツアーに参加することをお勧めする。この「シンシン」は歌って踊る部族の民族舞踏の総称で、英語のSingに由来しており、全国で様々な部族の踊りを見る事ができるのは多民族国家パプアニューギニアの大きな特色であり魅力でもある。

一方、太平洋戦争の激戦地であったパプアニューギニアは、戦時中、東部ニューギニアと呼ばれ、日本も多くの犠牲を払った。現在でも厚生労働省や各団体から個人のご遺族まで各地に慰霊巡拝を行っている。

慰霊団（写真提供酒光幸子）

●ダイビング

この国で最も人気のマリンスポーツがスキューバ・ダイビングで、各地には小規模ながらダイビングリゾートやダイビングサービスが点在している。WWF（世界自然保護基金）は、地球上で最もサンゴの種類が多い500種類以上のサンゴが生息する地域としてソロモン諸島、パプアニューギニア、インドネシア、フィリピンの海域を指定しコーラルトライアングルと名付けて保護活動を啓蒙しているが、パプアニューギニアの海はサンゴ豊かで海洋生物の宝庫ということができる。欧米はじめ著名な海洋研究者や写真家も多く訪れている。ダイビングリゾートやサービスがあり誰でもダイビングが楽しめる場所は、首都ポートモレスビーをはじめアロタウ、トゥフィ、マダン、キンベ、ラバウル、ケビエンの７か所で、その他にダイビングクルーズ船も数隻運航している。各地に１～２か所のダイビングサービスしかないため海は手つかずの様に美しく保たれており、各々特色を持っているがサンゴの豊かさと魚影の濃さは共通している。また太平洋戦争の激戦地であったことから軍用船舶や軍用機のレックポイントも多い。雨季と乾季で海況が大きく異なるので、訪れる時期と趣向で各旅行会社に相談するとよい。

スキューバ・ダイビング

●サーフィン

パプアニューギニアの北部海岸には11～3月フィリピン方面からモンスーンのうねりが到達しサーフィンを楽しむことができる。サーフロッジは現在バニモ、マダン郊外、ケビエンにあり、良質でコンスタントなファンウェーブをコントロールされた人数で、存分に楽しめるようになっている。この国には適正なサーファーの受け入れとサーフロッジを運営する地元民との友好を通じてサーフィン文化の普及と発展を目的とするパプアニューギニア・サーフィン協会があり、各サーフロッジの運営を助けている。日本でもツアーを扱っている旅行会社があるので相談するとよい。

サーフィン

●フィッシング

パプアニューギニアでのフィッシングは、サービスは限られているが、海、川ともに魅力的なフィッシングスポットとなっている。海沿いのホテルやリゾートでも簡単なフィッシングトリップを提供してくれる場合があるが、ある程度本格的なフィッシングが可能なのは、海ではトゥフィ、マダン、キンベ、ラバウル、ケビエン、川で

フィッシング

はキンベ、フライ川、ベンズバック川、マーレー湖です。海ではＧＴ狙いのキャスティングはもちろん、トローリングやジギングで大型のイソマグロやヨコシマサワラなどを狙える。川ではパプアンバスなどの大物狙いができる。手配は旅行会社か海外ツアーを企画するプロアングラーに相談するとよい。

●トレッキングと登山

日本で知られるパプアニューギニアのトレッキングは、本島中央部を東西に走る3000m級のビスマルク山脈の最高峰、ハイランド地方のウィルヘルム山（標高4509m）で、標準的な日程は4泊5日、日本のトレッキングツアー会社企画では前後にゴロカやマダン観光が組み合わされている場合が多い。また外国人トレッカーを一番多く集めているのは、ニューギニア島東部を東西に走るオーエンスタンレー山脈の北側のココダから山脈を越え南ポートモレスビー郊外のソゲリ村までのココダ・トレイルを７～１０日間で踏破するコース。かつて太平洋戦争中、日本軍の南海支隊がポートモレスビー攻略の為に歩き、迎え撃

トレッキング

つ豪州軍と激戦を行ったルートで、総距離は約96㎞、熱帯雨林のジャングルの中、急峻を延々と歩き続けるこのルートは世界的にも難路とされているが、戦争の歴史を風化させない為、と言うオーストラリア政府の後押しもありオーストラリア人を中心に年間数千人が訪れる人気のルートだ。

●自然観察ツアー

熱帯雨林が生い茂るジャングルは動植物の宝庫であり、ポートモレスビーでさえ郊外に少し車を走らせると大自然への入り口となる。

（バードウォッチング）

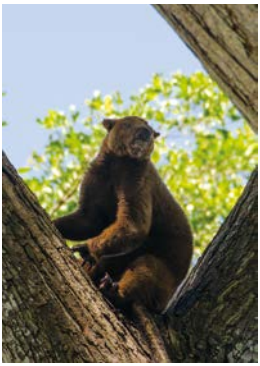
鳥類は約700種類が生息し、内390種が固有種であると言われる。日本では正式名がフウチョウ（風鳥）である極楽鳥だけでも、全42種類のうち38種類がパプアニューギニアで確認されている。国旗やニューギニア航空のシンボルにも使われている国鳥のアカカザリフウチョウも極楽鳥の一種で全長30 ～ 40㎝あり、オスの飾り羽根は目を見張るほど美しい。天敵が存在しなかったため、繁殖のために如何に派手に踊るか、と言う事に特化して進化したとされるフウチョウは様々な踊りで観る人を楽しませてくれる。

国鳥のアカカザリフウチョウ

またハイランド地方では標高の高い場所に生息するフキナガシフウチョウやオジロオナガフウチョウ、低湿地帯が広がるフライ川流域ではオオギバトやヒクイドリなどが観察できる。またニューブリテン島など島嶼部でも固有種や亜種を探すのも人気のひとつとなっている。首都ポートモレスビー郊外のバリラタ国立公園は首都から僅か1時間にもかかわらず野鳥の宝庫で、世界中から愛鳥家が集う。

（動物観察）

250種類の哺乳類が生息しているが、ニューギニア島の生物区分は有袋動物が特徴のオーストラリア区に属し、アジア大陸の影響はほとんど受けていない。木登りカ



木登りカンガルー

アドベンチャーパーク

ンガルーやクスクス、ワラビーなど60種類の有袋動物が生息している。他には果物を食べるフルーツ・コウモリ、恐竜時代から進化せず卵を産む哺乳類、ハリモグラなどがおり、豹や虎などの猛獣はいない。爬虫類は約110種類の蛇と2種類のワニ、最大3mにもなるウミガメ（レザーバックタートル）を始め13種類の亀などが確認されている。こうした動物を手軽に観察するにはポートモレスビーの動植物園「アドベンチャーパーク」または「ネイチャーパーク」を訪れるとよい。

（蝶・昆虫観察）

蝶の観察は有名で、世界中のマニアが注目している。オロ州のポポンデッタ周辺には世界最大で羽を広げると30cmほどのアレキサンドラ・トリバネアゲハがおり、その他、メガネトリバネアゲハ、ゴクラクトリバネアゲハ、キマエラトリバネアゲハもいる。マダンには観光用の「インセクトファーム」もある。マダンやワウ、ハイランドでは、早朝のジャングルで様々な種類を見られる。昆虫については、日本でも人気の黄金に輝くパプアキンイロクワガタやパプアヒメカブト、昆虫類で世界最大の表面積を持つ蛾であるヘラクレスオオヤママユ、巨大なゴライアス・ナナフシなど珍しい種が多く生息している。

（蘭・植物観察）

主に熱帯雨林を中心に9000種に近い植物があるが、蘭についても3000種類も あり、世界の観賞用の蘭の多くがここから広がったと言われている。ファレノプシス（胡蝶蘭）、デンドロビューム、バンダ、パフィオペディラムを初めとし、現在知られている世界の蘭のうち3分の2はパプアニューギニアが原産地であるといわれ

アドベンチャーパークのラン園に咲くニューギニア島の
デンドロビュームの仲間

る。ポートモレスビー郊外の「アドベンチャーパーク」の国立ラン園では1年を通じて様々な蘭が観賞できる。海抜2000mを越えるハイランド地方ではシンビジュウム、セロジネ、アーティコーリナム、オーランティロゼウム、カリキュメンタム、フロックス、2005年の世界ラン展日本大賞を受賞したデンドロビュームカスバートソニーなど高地性の蘭が見られる。

●シンシン・ショー

シンシンはパプアニューギニアの民族舞踏の総称で、冠婚葬祭などの時に村々で伝統的に行われている。そして様々な部族が年に一度、各都市部に集まって各々の民族舞踏を披露するのがシンシン・ショーである。

最も有名なのが毎年8月開催マウントハーゲンのマウントハーゲン・ショー、9月開催ゴロカのゴロカ・ショーである。元々は部族抗争に明け暮れていた村々を、戦いではなく、伝統的な衣装や踊りで競争させる事を目的として始められた、と言う経緯から、特に男性グループが入場する際は、リズミカルな打楽器の音をバックに歌い踊りながら出陣する戦闘部隊の壮行会の様で、会場は異常な熱気に包まれる。

アロタウで開催されるクンドゥ＆カヌーフェスティバルのカヌーレースの様子

この他、7月にはラバウルでマスク・フェスティバル、11月にはアロタウでクンドゥ＆カヌーフェスティバルなど各地でシンシン・ショーが開催されている。

●セピック川流域クルーズ

パプアニューギニアは総延長1000㎞を超える世界でも有数の大河セピック川があり、変化に富んだ流域には200を超える部族が生活し、川は魚などの生活の糧の源であると共に主要な交通手段として村人の生活に密着している。このセピック川流域を訪れるには中流域を豪華客船に宿泊しながらクルーズするツアーと、モーターカヌーで村々に宿泊しながら中流～上流域を訪ねるパターンがあり、予算や旅行スタイルに合わせて選ぶことが出来る。一般的に人気のある行程は3泊4日で、広大な湿地帯を旅しながら各村を訪問する。流域には精霊信仰に関連した仮面や彫像など民芸品が多くあり、その芸術性は高く評価されている。民芸品の購入は可能だが、精霊の儀

快適なセピッククルーズ客船

式に使われた古い木像を国外に持ち出すことは、犯罪となるので注意したい。

●太平洋戦争戦没者の慰霊巡拝

パプアニューギニアには推定で13～15万人の日本人戦没者が眠っている。戦跡地は主要都市や観光地から離れていることも多いが、公的な慰霊碑は都市部に建立されている。車が通れる道がない奥地へは航空機をチャーターして空から慰霊をしたり、ボートで慰霊地近くの沿岸部まで行ってお参りすることもある。慰霊巡拝ツアーの場合、多くは戦没地に応じて、ニューブリテン島などのビスマルク諸島を巡るか、ニューギニア島を巡るコースが多い。ビスマルク諸島では「南太平洋戦没者の碑」があるラバウルの他、ロレンガウ、ケビエン、ツルブ、ヌマヌマ、トロキナ、ブイン等を、ニューギニア島では「ニューギニア戦没者の碑」があるウェワク、アイタペ、ボイキン、ハンサ湾、ボガジン、サラモア、フィンシュハーフェン、ラビ、ブナなどを訪れる。

ラバウルの日本とPNG政府建立の「南太平洋戦没者の碑」

ショッピング

パプアニューギニアの代表的なお土産には、次の様なものがある。

ゴロカのコーヒーの一種

- **コーヒー**：主にハイランド地方で作られるアラビカ種のコーヒーは世界中に輸出されている
- **チョコレート**：各地の独特な味と香りのカカオも世界に輸出されている
- **ビルム**：ハイランド地方を中心に自然素材や毛糸を独特な編み方で編んだ手づくりのバッグ。

ビルム売り（ゴロカ）

- **ドゥクドゥク人形**：ラバウルのトーライ族の精霊を象った人形
- **ストーリーボード**：セピック川流域の生活や出来事を木板に彫り込んだ壁掛けの飾り物
- **木彫り・木工品**：各地の精霊を象った木彫りや、伝統的な文様をあしらった物入やステッキなど貝殻をはめ込んである美しい装飾が施されたものも多い
- **クンドゥ**：筒状にくり抜いた木にトカゲ

セピック地方の精霊をかたどった木彫り

の皮を張った手持ちの太鼓で、踊り歌いながら演奏する

・**石鹸**：ヤシの実など天然素材で作られた石鹸で、ノニやモリンガオイルなどを調合したものもある

・**陶器**：ロクロを使わない素朴な素焼きの壺や器で、産地としてはセピック川上流域のアイボム村、マダン近くのヤボブ、ビルビル村のもの、ハイランドのカイナンツーが有名

・**金細工**：パプアニューギニアには金鉱山があり海外にも輸出しているが、ゴクラクチョウやクンドゥなどを模したペンダントヘッドや各種アクセサリーがある

・**伝統品**：マスク（お面）、弓矢や槍などの武器、バンブーフルート（竹笛）など伝統儀式で使われる品々

お土産用に制作されたものが広く出回っている

ニューギニア島南東地域（Southern Region）

首都行政区（National Capital District）
ポートモレスビー（Port Moresby）

首都行政区(NCD: National Capital District)の首都ポートモレスビーは人口40万人、オーストラリア、ニュージーランドを除く南太平洋島しょ国で最大の都市である。

植民地時代からタウンと呼ばれる市街地、昔からの政府庁舎が並ぶコネドブ、フィッシュマーケットのあるコキ、産業センターのバディリの他、パリ、バブコリ、ハヌアバダ、タタナ等モツ族の集落が海岸沿いに並ぶ。内陸へ丘陵地帯を超えるとタウラマから3マイル地区、ボロコ～ホホラ～ワイガニと南東から北西に続く渓谷地帯となっている。さらに内陸へ5マイル地区からもうひとつ丘を越えると空港のある7マイル地区、モラタからワイガニ湿地帯といった平野部に続いてゆく。この地形から天然の良港を利用して作られたポートモレスビーは２つの丘で３つのエリアに分かれた首都である。

首都ポートモレスビーの現在のタウン

＜マイルという地名の由来＞

マイルは太平洋戦争時、オーストラリア軍によってつけられた大まかな地区名で、レイなど他の都市でも一部使われている。ここポートモレスビーの場合、タウン地区中心地から郊外へ向かうヒューバート・マーレー・ハイウェイの距離数で名付けられた。当時のオーストラリアは現在のメートル法でなくマイル法だった。現在使用されているのは、2・3・4・5・6・7・8・9・14・15・17で、区分けは大まかで正確な境界線はない。また丘陵部には「2マイルヒル」「5マイルヒル」と呼ばれる地区もある。因みにポートモレスビー・ジャクソン国際空港は7マイルにあり、戦争当時は「7マイル・エアストリップ」と呼ばれていた。

エアウェイズホテルから見下ろしたポートモレスビー空港

ポートモレスビー空港国際線ターミナル

ポートモレスビーはサバンナ気候で年間降雨量は約1000mm、国内で最も乾燥した地域である。12～4月は雨季だが一日中雨が降る事は稀で、殆どは夕方のスコールである。逆に5～11月は全く雨が降らない日が続く事があり、この時期に街を上空から見ると緑が少なく赤茶けて見える。乾季の終わりごろには雨不足によって水力発電が十分に出来ず、電力不足となるので計画停電(Load-Shedding)が行われる。雨季の最高気温は30度を超えで蒸し暑いが、乾季の最低気温は20度近くまで下がる。特に6～8月は南東からの貿易風の影響もあり、朝は肌寒く感じるほどである。

1980年代には他州から多くの移住者が押し寄せたが、その多くは学歴、技術、人脈もなく職を見つけることが出来ず､そのまま都市に居座り不法居住区（セトルメント）を形成し、強盗、カージャック、住居侵入、銀行強盗などの犯罪を犯すようなった結果、町の治安は急速に悪化した。

一方、政府や有力企業の職員の多くですら都市部の高額な家賃や生活費が払えず、セトルメントに居住せざるを得ないのが現状で、ポートモレスビーの人口の60%以上が50を超え

る不法居住区に住み、犯罪の温床や部族間抗争の頻発地域となる他、居住空間の過密化に加え水道や電気のインフラもないため、保健衛生上の問題も発生している。こうした問題から現在でもポートモレスビーは、内戦や紛争が続くアフリカや中東地域の都市と並んで「世界で最も住みにくい街」と言う不名誉なランキング上位に位置している。

政府や一流民間企業が集中し高学歴者が各地から集まるポートモレスビーの識字率は90%近くで他州と比べると群を抜く。一方、他州からの移住者が増えた結果、この地域の原住民であるモツ＝コイタブ族の人口比率10%を切るに至っている。

2000年代後半、米国エクソンモービル社が主導し日本企業も参画するLNG（液化天然ガス）プロジェクトが始まり大量の外国人労働者、出張者が流入し、ホテルやアパート等が瞬く間に満室になり、大幅な供給不足に陥った。この時、市内の殆どのホテルでは予約が取れず、ホテルの宿泊料やアパートの家賃は短期間のうちに3倍以上に高騰した。この不動産バブルにより小規模なロッジから大型のホテル、アパート等の建築ラッシュが始まり、続く2015年パシフィックゲームズ（太平洋スポーツ大会）、2016年FIFA 女子U-20ワールドカップ大会、そして2018年のAPEC（アジア太平洋経済協力会議）という大型イベントの開催が相次ぎ、大型ホテルの新規開業、道路網の整備が行われてきた。

APECで整備された国会議事堂前の道路

こうした急激な需要増による近代化で都心部では土地不足となり、現在ポートモレスビーの都市開発は空港よりも郊外へと広がり、それまで不法居住区（セトルメント）と雑貨商しかなかった9マイル付近に大型のスーパー・マーケットやガソリンスタンド、中産階級用の住宅地区などが造成され始めた。

歴　史

ポートモレスビー地区の原住民はコイタブ族と言われる。

ここに数百年前に移住してきたのが海洋民族のモツ族で、ミクロネシアが起源と言われている。

モツ族は地上に住むことを好まず、海岸沿いに水上部落を作って行き、現在も水上に暮らしている。

このため先住民との土地を巡る争いは起きず、やがて婚姻関係を通じてモツ＝コイタブ族と言うコミュニティを平和的に創り上げていった。

コイタブ族の言語であるコイタ語を話す人口は年々減少しており、消滅していく言語といえる一方、モツ族の言語であるモツ語はモツ＝コイタブ族の間で広く話されるほか、モツ語から派生したヒリモツ語が貿易や警察の共通語としてセントラル州、ガルフ州、オロ州、ウェスタン州の確認に広がり、国の共通語の一つともなっている。なおヒリモツ語は1960年代には警察官、公務員を中心として共通語として広く使われていたが、現在では英語とピジン語に押され、特に他州からの移民の若い世代では全く使われなくなっている。

モツ族の民族衣装を着た子供

モツ族の水上部落

降水量が少なく土壌が貧弱なポートモレスビーは農業に適さず、モツ族は素焼きの土器を作り、これらをガルフ州などの村々と交易して食料と交換していた（ヒリ交易）。ヒリ交易では大型の帆走カヌー「ラガトイ」を作り、毎年6月頃から吹く南東の貿易風（ラウラバダ）を利用して遥か西の村々へと旅立って行った。

素焼きの土器は保存食であるサゴ（サゴ椰子のでんぷん粉）等と交換され、11月に風向きが北西のモンスーン風（ラハラ）変わるとラガトイは帰路に就いた。帰路は重いサゴを積んで不安定なうえに、しばしば海が時化、多くのラガトイが遭難して乗員が亡くなっていたので、女性たちは家族の帰りを心配して待ち続け、ラガトイの姿が見えると喜びに踊ってこれを迎えた。

ポートモレスビーの名は、1873年にイギリス海軍提督のジョン・モレスビーが発見し、父であるフェアファックス・モレスビーに因んで2つの入り江をフェアファッ

ポートモレスビーのダウンタウン地区

ポートモレスビーのダウンタウン地区エラビーチ付近

クス港、モレスビー港と名つけた事に由来する。1884年11月６日に英国はポートモレスビーの丘にユニオンジャックを立て、ニューギニア島の東南部の領有を宣言した。これが英国領ニューギニアの始まりであり、独立前のクイーンズランド（オーストラリア大陸）をドイツから守る事が主要な目的であったという。その後オーストラリアが独立すると1905年に英国領からオーストラリアに譲渡され､改めて｢オーストラリア領パプア｣となった。

太平洋戦争では連合軍の基地でありオーストラリアの防衛線であったポートモレスビーは、何度か日本軍の攻撃目標となった。1942年5月の「珊瑚海海戦」に続き、7月には太平洋側から上陸して陸路攻略を目指し、日本軍が大きな被害を被った南海支隊による「ポートモレスビー作戦」ともにポートモレスビー攻略には至らなかった。フィリピンを日本軍に奪われた米軍マッカーサー元帥は、1942年11月から1944年10月までポートモレスビーに南西太平洋方面司令部を設置して連合軍の指揮を行い、フィリピン奪還を目論んだ。

戦後、オーストラリア領パプアと北部の信託統治領ニューギニアが合併されて一つの行政単位となり、オーストラリアの準州である「パプア・ニューギニア準州」Territory of Papua New Guineaとなった。

1975年パプアニューギニア独立国として平和裏に独立、ポートモレスビーは首都となった。この時ワイガニにある独立の丘ではオーストラリア国旗を降ろし、パプアニューギニアの国旗を掲揚するセレモニーが行われた。

独立後、ポートモレスビーは激しい政争の舞台となることもあった。1997年、英国の傭兵部隊を雇ってブーゲンビル紛争の武力解決を狙った当時のジュリアス・チャン首相に対し、国軍のシンギロック長官が国営ラジオ局をハイジャックして首相退陣の要求をした事でクーデター騒ぎとなり、首都には戒厳令が引かれ数日間封鎖された（サンドライン・クライシス）。

また2011年、国外で入院中のソマレ首相を本人不在のまま国会決議で更迭し、新首相としてオニール氏を選出した。それに

首脳会談が行われたAPECハウス

対し、帰国したソマレ氏が最高裁判決を得て「決議は憲法違反であり自分が首相である」と主張した事から、二人の首相、軍司令官、警察長官が立つ異常事態となり、一触即発の緊迫状態が続いた。
なお、この政争は2012年まで続いたが、総選挙でオニール氏が新首相に選ばれると両者は和解して事なきを得た。

2018年にはパプアニューギニアで初めてのアジア太平洋経済協力会議（APEC）が開催された。治安の問題やインフラ不足で大型の国際会議に対応できるのか心配されたが、各国の協力もあり、2月から始まった各部会や実務者会議がから11月の首脳会議まで大過なく終え、開催国としての面目を保った。

産　業

ポートモレスビーは農業と製造業以外の民間企業の本社が集まり就労者数は国内で抜きんでている。

国内通信のデジタル化に伴い2007年から携帯電話産業に参入した国際企業のデジセル社は、近年インターネット・プロバイダーやケーブルテレビ局等の買収を行い、電波ビジネスの寡占を図っている。

小売業では建設バブルに呼応して2011年、スーパーマーケット、レストラン、フードコート、各種専門店、銀行、映画館、ナイトクラブなどを持つ大型複合商業施設「ビジョンシティ・メガモール」が開業している。また近年は中国資本の流入が大きく、ダウンタウン地区では中国国営企業による23階建ての複合施設「ノーブルセンター」が建設されている。

一方地元資本ではPMV（乗り合いバス）やタクシーといった交通機関の運行が大きなビジネスであり、治安が悪く警察力が脆弱なため、会社、アパートメント、ホテル等向けの民間警備会社も多くの警備員を雇用する主要産業となっている。

物流では19世紀後半の開港以来、ポートモレスビーの流通を担い、レイに次ぐ取扱高を誇るダウンタウン地区の港湾設備が、都市再開発計画により郊外のフェアファックス港のモトケアに移った。

教育研究機関

パプアニューギニア大学 University of Papua New Guinea(UPNG)は国の最高教育機関として1965年の創立以来、政官界を中心に人材を送り出している。独立から現在に至るまで8名の首相のうち4名がUPNGの卒業生である他、国会議員、中央銀行総裁、最高裁判事、各省庁の事務次官などの要職を占める。また国内唯一の医

学部を有しUPNGを卒業した医師は各医療機関で活躍している。

14マイルにあるパシフィック・アドベンチスト大学 Pacific Adventist University (PAU)はセブンスデー・アドベンチスト教会が運営する私立大学で、1983年の開校以来長らく単科大学であったが1997年より総合大学となった。PAUはパプアニューギニアのみならず、ソロモン諸島、フィジー、サモア、トンガなど南太平洋諸国からの学生を受け入れている。

ナショナル・リサーチ・インスティテュートNational Research Institute (NRI)はオーストラリア国立大学のニューギニア研究部門として1961年に設立され、現在では国の経済、社会、政治問題などを研究する国立の調査・研究機関となっている。外国人による社会科学系の調査にはNRIからの調査許可が必要となっている。

ポートモレスビーと周辺のアクティビティ・イベント

●スキューバ・ダイビング

ポートモレスビーとその周辺の海沖合にはバリアリーフが横たわり、サンゴや地形が楽しめる美しいダイビングスポットになっている。その他、海洋調査用に漁礁として沈められた船舶のレックダイビングも楽しめ、在住外国人を中心として週末の人気アクティビティとなっている。コアなダイバーの間では色鮮やかなボロカサゴ（レーシースコーピオンフィッシュ）やピグミーシーホースなどダイバー人気の生物の宝庫として知られ、根強いファンがいる。

美しいポートモレスビーの海中世界

国立博物館

National Museum

パプアニューギニアの先史時代からのコレクション、交易に使われたカヌーや狩猟・漁労道具、シェルマネー、腕輪やヘッドドレス等の装飾品、ガラムートやクンドゥなどの楽器、部族の仮面やトーテムなどを集めた博物館で近年全面改装された。近代史部門ではP-38戦闘機などの航空機の残骸なども屋外展示されている。

リニューアルした国立博物館の館内展示

国会議事堂

National Parliament

1984年、チャールズ皇太子によって公式にオープンされたパプアニューギニアの

国会議事堂

国会議事堂は、マプリック地方のハウス・タンバラン（精霊の家）を模した正面玄関やハイランド地方の住居ラウンドハウスを模した宴会場など、様々な部族のアートや伝統を取り入れている。

国会が開催されていない平日の日中に限り内部を一般公開しており、グランドホールではトリバネアゲハを始めとする蝶や珍しい昆虫のコレクションや本会議場も見学する事が可能だが、サンダル履きや衿無しシャツでは入場できないので注意。

アドベンチャーパーク

Adventure Park PNG

ポートモレスビー郊外、14マイルにある大規模な公園で、バーベキュー施設、ウオータースライダーや遊戯施設があって住民憩いの場となっている他、国立ラン園やパプアニューギニアの固有種が揃う動物園もあり、一見の価値がある。ドーム型の大型の鳥小屋では複数の極楽鳥を見ることが出来る他、木登りカンガルー、ヒクイドリ（カソワリ）、巨大なワニが飼育されており、週末のクロコダイル・ショーは住民に人気だ。

ボマナ戦争墓地

Bomana War Cemetery

ポートモレスビー郊外にある英連邦によって運営される戦争墓地。

整備された芝生が美しい広大な敷地に3824名の戦没者が眠る。毎年4月、オーストラリア・ニュージーランドの戦没者追悼式であるアンザック・デーでは夜明け前からセレモニーが行われる。

ボマナ戦争墓地

コキ・フィッシュマーケット

Koki Fish Market

既存のコキ・マーケットとは別に2016年に新しく整備された、魚介類のみを扱う市場で、駐車場、売店、船着き場、トイレを完備し、購入した魚を有料で捌くサービスもある。

活気溢れるコキ・フィッシュマーケット

場内は漁師が持ち込んだ獲れたての魚介類が並び、活気にあふれ行きかう人々を見てるだけでも楽しい。

ネイチャーパーク
Port Moresby Nature Park

ワイガニ地区のパプアニューギニア大学の敷地内にある動植物園。かつてはNCDボタニカルガーデンと呼ばれていた州立植物園であったが、民間企業に運営が委託されて改名された。カフェやキッズコーナーが充実しており、住民の憩いの場となる他ウエディングや誕生パーティー等のイベントにも使われる。広いヒクイドリの檻や木登りカンガルーのコーナーもあり、爬虫類コレクションは見もの。

工夫を凝らした展示のネイチャーパーク

ロイヤル・パプア・ヨットクラブ
Royal Papua Yacht Club

英王室をパトロンとするロイヤル・ヨットクラブの一員として1921年から続く由緒あるヨットクラブ。
メンバーは週末にクルージングやフィッシングを楽しむ他、停泊する船に住む人も多い。

マリーナを見渡すマクドゥイ・レストランは評判。メンバー用だが、観光客の場合は事前予約で食事をする事も可能。

バリラタ国立公園
Varirata National Park

ポートモレスビーから車で1時間、ソゲリ高原に位置する自然保護区。

広大な敷地に極楽鳥を始め200種類の野鳥、ワラビー、インドネシアから輸入種の鹿、蝶やランなどの動植物が生息し、訪れる野鳥愛好家には必須のスポット。

2015年より始まった日本のODA「生物多様性プロジェクト」によりインフォメーション･センターやトレッキング･コースなどが整備されている。

ソゲリ高原のバリラタ国立公園からの眺め

ヒリ・モアレ・フェスティバル
Hiri Moale Festival

ヒリ交易の歴史を偲び文化の継承を目的としてポートモレスビーで9月ごろに開催される民族の祭り。

この祭りのために大型走カヌーのラガトイが造られ、対岸のマヌバダ島からエラビーチに掛けて航行し、ラガトイの到着を迎える喜びの儀式（モアレ）を再現する。またこの祭りでは各村を代表する未婚女性

による「ヒリ・ハネナモ・クイーン」のミスコンテストが行われる。開催日程は年によって変わるので注意が必要。

ヒリ・モアレ・フェスティバルで
披露されるラガトイ帰還を祝う踊り

ポートモレスビーのホテル

エアウエイズホテル

Airways Hotel（Tel：324-5200）

ジャクソンズ空港に近い丘に建つ最高級ビジネスホテル。スタンダードタイプのバッカス・ルーム、デラックスタイプのファウンテン・ルーム、エグゼクティブタイプのダコタ・ルーム、スイートがあり、長期滞在者用には「レジデンス」を提供する。かつてはシンプルなエアポート・モーテルであったが改装と増築でパプアニューギニアを代表するホテルとなった。過去にはチャールズ皇太子、ビル・クリントン元大統領、安倍首相など世界の元首や首脳の宿泊もある。地中海料理のバッカス・レストラン、空港を見渡すプールサイドのブエ・レストランでのビュッフェなどが人気。

国賓も宿泊するエアウェイズホテル

スタンレーホテル

Stanley Hotel（Tel：302-8888）

ジャクソンズ空港から10分、ワイガニ官庁街近くに建つ高層高級ホテル。

部屋はスタンダード、デラックス、エグゼクティブ、スイートとあり、長期滞在者用にキッチンの備わったアパートメントタイプもある。プールやジム、スパを備え、会議場では大小のイベントが開催される。

「ビジョン・シティ」ショッピングモールに直結して買い物や食事に便利。

ショッピングモールに直結する近代的なスタンレーホテル

ゲートウエイホテル

Gateway Hotel（Tel：327-8100）

ジャクソンズ空港から送迎車で2分、独立前から「玄関口」＝ゲートウエイであり続ける老舗ホテル。

日本のツアー会社もあるゲートウェイホテル

デラックス、プレミアー、エグゼクティブ、スイートがあり、広大な敷地内には長期滞在者用のアパートメント棟もある。プールサイドのメインレストラン「ワイルド・オーキッド・レストラン」、サラダバーが評判の「シズラーズ」、空港を見下ろすお洒落な「ジャクソンズ」など食事のチョイスも豊富。

日系のツアーオペレーター「ＰＮＧジャパン」社がツアーデスク兼ギフトショップを運営しており、出張者には運転手付きの車両貸し出しを行う。観光、ビジネスの拠点として、又トランジットの利用にも便利。

グランドパプアホテル

Grand Papua Hotel（Tel：327-8100）

太平洋戦争中、連合軍司令部が置かれたダウンタウンの旧パプアホテル跡に建てられた高層ホテル。

ビジネス客が多く利用するグランドパプアホテル

銀行、港湾関係、エネルギー関係の会社などが本社を置くCBDの中心に建ち、ビジネスの拠点として便利なロケーション。空港まで送迎車で20 ～ 30分

ロロアタアイランドリゾート

Loloata Island Resort（Tel：7108-8000）

かつてのダイビング・リゾートをラマナ・デベロップメント・グループが買い取り大幅に改修、2019年にオープンしたアイランド・リゾート。海水浴、カヤック、スノーケリングなどのアクティビティが可能で、週末はポートモレスビーからの日帰り客も多い。ポートモレスビーからタヒラ港の専用桟橋まで車で20分、タヒラから専用の送迎ボートで15分。

高級リゾートホテルに生まれ変わった
ロロアタアイランドリゾート

ポートモレスビーの交通

ポートモレスビーそしてパプアニューギニアの空の玄関口、ポートモレスビー・ジャクソンズ国際空港には国営ニューギニア航空の他、カンタス航空やフィリピン航空な

ど外国の航空会社も乗り入れており、ケアンズ、ブリスベン、シドニー、シンガポール、マニラ、香港、ホニアラ、ナンディとの航空路線を結んでいる。ニューギニア航空、PNGエアの他、チャーター航空会社のトロピックエアもここを本拠として国内各地へ運航している。

道路網は国内で最も発達しており、都心部では立体交差、信号機、ラウンドアバウト（環状交差点）が設置され、郊外へ向かう道路を含め多くが舗装されている。

海岸近くのダウンタウンから空港方面へは旧道のヒューバート･マーレー･ハイウェイとポレポレナ・ハイウェイ、コウラ・ウエイが並行するように走りワイガニドライブと直角に交わる。

海岸道路の「ナパナパ・ロード」は巨大なモツ族の集落「ハヌアバダ村」を抜けフェイアファックス湾を回ってナパナパ精油所へと続く。途中分岐した道は州境を超えてパパ・レアレア村に造られた巨大なPNG液化天然ガスプラントへと続いている。

「ヒューバート・マーレー・ハイウェイ」は、空港手前の6マイルで分岐し東の海岸沿いを走る「マギ・ハイウェイ」、セントラル州に入り空港を超えて9マイルで東北に走る「ソゲリ・ハイウェイ」、西に向かう「ヒリタノ・ハイウェイ」にそれぞれ分かれる。「ソゲリ・ハイウェイ」はボマナ、PAUやアドベンチャーパークを通り17マイルを経由して標高600mの高原の街ソゲリまで繋がる。一方「ヒリタノ･ハイウェイ」はセントラル州からガルフ州まで走っている。

ポートモレスビー空港国際線サテライトの免税店

ミルンベイ州（Milne Bay Province）

ミルンベイ州はニューギニア島の最東端、北はソロモン海、南は珊瑚海に面した州で、400以上の島を有する海洋州と言える。

気候は熱帯雨林気候で最高気温は11～2月には30℃を超えるが、6～8月は30℃未満の日も多く南東の貿易風の影響もあり、体感的には涼しく感じることも多い。年間降雨量は3000mmで年間を通じて多雨だが、11～3月にかけては月間降雨量が200mm以下で晴れの日が多く、一方6～8月は400mmを超える月も多く、パプアニューギニアの一般的な雨季・乾季とは逆になっている。

州都アロタウの町とミルン湾を隔てた対岸

歴　史

太古から島々の間で行われていた物々交換である「クラ・リング交易 Kula Ring」は南太平洋で最も豊かな文化遺産の一つと言われる。この交易はバギと呼ばれる特別な赤い貝のネックレスが時計回りに、ムワリと呼ばれる白い貝の腕輪が反時計回りに、数十キロから100キロも離れた島々をリレー式に廻り、地域の平和と互助が維持されていた。

1891年にロンドン・ミッショナリーがクワト島(Kwato Island)に設立したクワト教会は、教育機関として原住民へのボート製造技術指導、農業研修、管理者研修などを国内で初めて行い、一時期はここで専門教育を受けた人たちがパプアニューギニア発展の一翼を担っていた。因みに地元企業でボート船体製造会社のサマライ・プラスチックス(Samarai Plastics)は、ここで培われた技術が現在まで受け継がれた会社で、長年にわたりエラモータース（Ela Motors PNG; 豊田通商が展開するトヨタ自動車とヤマハボートのディーラー）へのボート納入を行っている。

州南部のサマライ島(Samalai Island)はかつてオーストラリアとアジア間の交易の中継基地として重要な拠点でかつて州都であった。20世紀の初め頃、サマライは役所、貿易や港湾の民間企業、病院、学校、

クワト島のクワト教会

娯楽施設などが立ち並ぶ国際都市として栄え、当時の商取引額は首都ポートモレスビーの数倍であったと言われる。しかし太平洋戦争が勃発し、日本軍の占領を恐れた英国は街や港湾施設を破壊して撤退した。

日本軍は首都ポートモレスビーを狙って日本軍艦隊が1942年5月にニューギニア島の東海域において、連合軍艦隊と衝突(珊瑚海海戦)、この年の8月、今度はミルン湾奥に上陸部隊を派遣して陸路で進攻しようと試みたが、これも連合軍に阻まれた(ラビの戦い)。

戦後サマライは再建を目指したが、時代の流れもあり昔の繁栄を取り戻すことはなく、1969年に州都はニューギニア島アロタウに移された。2006年パプアニューギニア政府はサマライ島を国家歴史遺産として認定した。

日本軍上陸用舟艇の残骸

産　業

ニューギニア島の東に浮かぶミシマ島(Misima Island)のミシマ鉱山が長い間、金の採鉱で州経済を潤わせたが2001年に閉山、現在はパームオイル（ヤシ油）の生産と林業が主な産業となっている。

一方アジアからオーストラリアへ抜けるという地理的な優位性から近年アロタウ港には大型観光クルーズ船の入港が多く、こうした観光客受け入れも重要な収入元となっている。

主な都市や街

アロタウ（Alotau）

1969年にサマライから移された州都で人口約1万人、街には政府関係の建物、銀行、商店、船舶や港湾関係の会社がある。

アロタウと周辺の見どころ・アクティビティ・イベント

●スキューバ・ダイビングとフィッシング

珊瑚海（コーラルシー）とソロモン海が

サンゴが美しい水中世界

交わるミルンベイ州の海は、海洋生物の種類が豊富で固有種も多く、珊瑚の美しさとともに写真派・生物愛好家のダイバー憧れの海となっており世界的に著名な写真家も訪れる。
海でのフィッシングは在住外国人の大きな楽しみとなっており、フィッシングに特化したリゾートもある。

ターンブル戦争記念公園

Turnbull War Memorial Park

アロタウ市街から空港へ向かって15分程の道路脇に、太平洋戦争で日本軍と連合軍の交戦があった「ラビの戦い」を記念する「ターンブル戦争記念公園」がある。美しく整備された公園にオーストラリア建立の記念碑とプロペラなどが展示されており、毎年戦没者追悼式が行われる。

ターンブル戦争記念公園

アロタウ・タウンマーケット

Alotau Town Main Market

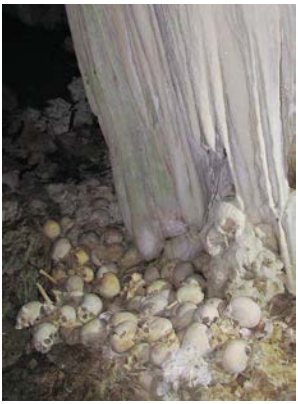
庶民の市場であるアロタウ・タウンマーケットは日本のODAで改修され、2019年に完成して引き渡された。ミルンベイの豊かな海で獲れる魚介類や野菜などが売られ、州の名物と言える手編みのバスケットなども購入することが出来る。

スカル・ケーブ

Skull Cave

アロタウから車と船を乗り継いで3時間ほど、イーストケープ近くのビルビルにあるカルスト洞窟には、人の頭蓋骨を集めた鍾乳洞がある。親族が亡くなると頭蓋骨を洞窟に収める習慣があったこの地域の人々の墓所となっている洞窟で、観光客も訪れることができる。

但しかならず地元のホテルや旅行会社を通じてガイド付きのツアーに参加すること。



スカル・ケーブ

アロタウ市内の戦争記念碑

ニューギニア島最東端の村に建つ宣教師の記念碑

クンドゥ・カヌーフェスティバル

National Kundu & Kanu Festival

海の民が住むミルンベイの伝統文化を祝うクンドゥ・カヌーフェスティバルは、毎年11月初旬の週末にアロタウで開催されている。ミルンベイ州各地からの色とりどりの伝統舞踊グループや、大型カヌーのレースを見ることが出来る、今では海外からを含め多くの観光客を集めるこの地域の一大イベントとなっている。

クンドゥ・カヌーフェスティバル

アロタウのホテル

アロタウインターナショナルホテル

Alotau International Hotel（Tel：641-0300）

アロタウの中心街近くの海岸沿いに建つ22室のホテルで会議室、ビジネスセンターやプールを備え、ビジネスステイや観光客にも対応。

アロタウインターナショナルホテル

マスリナロッジ

Masurina Lodge（Tel：641-1212）

アロタウの中心街の丘に建つ老舗ホテル。改装されたエグゼクティブ・ルームはベッドも広く快適。無料の空港送迎、無料Wi-Fi、プールなどを備え、アパートメントタイプの部屋では長期滞在にも対応する。

タワリ・リゾート

Tawali Resort（Tel：7364-0607）

アロタウから車とボートで約2時間、本島北部のホイア湾に面するダイビングリゾート。

魅力的なダイビングポイントが至近に広

タワリ・リゾート

がり、海外からのダイバーが集う。

アロタウの交通

アロタウ・ガーニー空港は町から車で20分、首都ポートモレスビーから約50分、ニューギニア航空、PNGエアの定期便が就航している。その他トロブリアンド諸島のロスイアへもPNGエアの定期便がある。

また多くの島々からなるミルンベイ州内の地元民の主な交通手段は、船外機付きの小型ボートや乗り合いの小型客船による海路となる。

乗り合いの小型客船

オロ州（Oro Province）

オロ州はニューギニア島南東部の北岸、ソロモン海に面した州で、南部はオーウェンスタンレー山脈を挟んでセントラル州と境を接する。

この地域にはアレキサンドリア・トリバネアゲハという、羽を広げると30cmにも達する世界最大で国際自然保護連合(IUCN)が作成する「絶滅のおそれのある野生生物リスト（レッドリスト）」で絶滅危惧種に指定され、ワシントン条約で取引が禁止されている蝶が生息している。

歴　史

内陸部のココダは19世紀末に金の産出に伴って開かれた街だが、太平洋戦争には日本軍南海支隊が、ポートモレスビー攻略作戦においてオーストラリア軍との激戦を繰り広げ、多くの死傷者を出した場所でもある。オーストラリア軍にとってココダでの戦いは、ニューギニア島南部沿岸の首都ポートモレスビーを日本軍に占領されるとオーストラリア本土が攻撃にさらされることから背水の陣となる祖国防衛戦であり、太平洋戦争の中で甚大な被害をだした陸戦のひとつでもあったことから、戦後も「ココダの戦い」として語り継がれ、ポートモレスビーとココダを結ぶこの急峻な道は「ココダトレイル」としてオーストラリア人を中心に年間数千人がトレッキングに訪れている。

ココダトレールの慰霊碑

産　業

おもな産業は農業と林業で、ヒガトゥル(Higatule)を中心とするオイルパームが最大の産業となっている。

主な都市や街

ポポンデッタ（Popondetta）

ポポンデッタはオロ州の州都で人口約３万人。1951年ラミントン山の噴火により、近くの町でその時の行政区ヒガトゥルを中心に約3000人の被害者を出した。その救援活動の拠点としてオーストラリア軍によって作られた街がポポンデッタで1975年パプアニューギニア独立と共に州都となった。

ポポンデッタの気候は熱帯雨林性で年間降雨量は2700mm。年間を通じて雨が多いが、6月から9月は月間降雨量が100mmで比較的晴れの日が多い。11月から3月は300mmを記録する雨季で、この時期には河川が氾濫、橋が流されたりす

る水害が頻発する。

ポポンデッタ周辺の見どころ・アクティビティ

トウフィ
Tufi

トゥフィは地理的に珍しい熱帯フィヨルド地形を有する州南部のネルソン岬にあり、ダイビングスポットとして世界的に知られる。太平洋戦争時、連合軍パトロールボート基地であった跡地に滑走路とリゾートホテルがある。

熱帯フィヨルド地形

トゥフィの民族舞踊（シンシン）

ココダトレイル
Kokoda Trail

ポポンデッタから車で4時間のココダとポートモレスビー郊外のオーワーズコーナー間の96kmの険しい山道を8日から10日掛けて踏破するトレッキングコースで、4月から10月の乾季に年間数千人がチャレンジする。

ツアーは主にオーストラリアの会社が催行しており、参加には医師の診断書と3か月に渡るトレーニングが必要。

ポポンデッタ周辺のホテル

ラミントンホテル
Lamignton Hotel（Tel：629-7222）

ポポンデッタの中心に建つ16室のロッジ。

ポポンデッタへのビジネス出張の他、日本やオーストラリアからの慰霊団にも使われる。

ラミントンホテル

トゥフィリゾート
Tufi Resort（Tel：323-3452）

トゥフィの入江を見下ろす丘に建つ26室のリゾート。

世界からダイバーが集う他、フィッシングやカヤッキングなど自然ベースのアクティビティを提供する隠れ家的なリゾートホテル。

トゥフィリゾート

ポポンデッタとトゥフィの交通

ポポンデッタへはニューギニア航空、PNGエアの定期便が就航しておりポートモレスビーからの所要時間は約35分、トゥフィへはPNGエアのみ週３便運航している。

ウエスタン州（Western Province）

ウエスタン州はニューギニア島の南部、インドネシアとの国境に位置し、国内最大の州面積を有し、かつセピック川と並ぶ２大大河であるフライ川と国内最大のマーレー湖も有する。一方陸地の大半は半永久の湿地帯または雨季には冠水する低湿地帯であるため、定住に適する場所が少なく、人口密度は国内最低である。

フライ川

フライ川流域の村

産　業

独立以来、広大な大地以外に特筆すべき産業もなく、経済的に最も貧しい州のひとつであったが、1984年に操業が開始されたウエスタン州北部のオクテディ鉱山(Ok Tedi Mine)は銅や金を産出し、国内有数の産業拠点のひとつとなった。

加えて林業も盛んになり、今ではガルフ州に次いで国内2番目の木材輸出額を誇る。

州都はパプア湾に浮かぶダル島のダルで、かつては真珠貝の交易などで栄えた町だが、現在は州政府機関の他は水産関係企業があるだけの小さな町である。

また南部国境近くの小さなリゾートロッジ、ベンスバッハロッジのアクティビティではバラマンディやパプアンバスなど大型の淡水魚を狙うフィッシングや鹿狩りを楽しむことが出来る。

ベンズバッハの淡水所フィッシング

主な都市や街

タブビル（Tabubil）

オクテディ鉱山に隣接する標高457mの町タブビルは、海外から出稼ぎに来る鉱山関係者の生活拠点として、スーパーマーケットや病院、インターナショナル・スクー

タブビルの鉱山労働者

キウンガ港

ルなどの生活インフラに加え、ゴルフ場、ナイトクラブなどの娯楽施設も備える。

タブビル、キウンガはオクテディ鉱山会社１社に頼った町であるため、2015年フライ川の渇水で鉱山業が一時停止した際には鉱山会社から町に供給されていた電気が止まり、病院、学校など町のインフラ機能が麻痺してしまったという事件も起こった。

タブビル一帯は多雨な地域で年間降雨量が10,000mmを超えることもある。

タブビルのホテル

ホテルクラウドランズ

Hotel Cloudlands（Tel：649-9277）

タブビル空港近くに建つ計25室のロッジでタブビル唯一の宿泊施設。

施設のクオリティに比して料金は割高だが選択肢は無い。

鉱山会社の関係者の宿泊や飲食の他、シーズンには海外からの野鳥観察ツアーの拠点としても利用されている。

キウンガ（Kiunga）

フライ川に面する港町のキウンガは、鉱山で産出される金や銅の輸出港として重要な拠点となっており、鉱山を支える運搬業者や海運会社などが操業する。内陸の低湿地帯に立地するキウンガは、国内で最も暑い街として知られ、最高気温は40℃近くになることもある。

またキウンガは世界の野鳥愛好家垂涎の地でもあり、パプアニューギニアのバードウオッチングのメッカでもある。鉱山業が終盤に向かう中、観光需要の増加が期待される。

キウンガのホテル

カソワリホテル

Cassowary Hotel（Tel：649-1800）

オクテディ鉱山とパプアニューギニア最大のホテルグループ「コーラルシーホテルズ」が共同で2018年に開業した高級ビジネスホテル。キウンガの街の中心部から近い、キウンガ～タブビルハイウェイ沿いに建つ43室のホテルはWi-Fi完備でレストラン、バー、会議室を備え、長期滞在者用のアパートメントもある。

カソワリホテル

タブビルとキウンガの交通

首都ポートモレスビーやマウントハーゲンとタブビルとキウンガの間は、ニューギニア航空、PNGエアが定期便を運航している。他に鉱山関係者によるチャーター便も多い。またタブビルとキウンガの間の147kmはキウンガ～タブビル・ハイウェイと呼ばれる道路で繋がれている。

キウンガ空港

キウンガ～タブビルハイウェイ

ニューギニア島北西地域（Momase Region）

モロベ州（Morobe Province）

モロベ州はニューギニア島北岸の州で、西側をマダン州と東ハイランド州、南東側をガルフ州、セントラル州、オロ州と境界を接し、州の人口は国内最大である。地理的には高い峰々と国内最大級のマーカム渓谷を持ち、多雨地帯と乾燥地帯とを併せ持つ。製造業や物流の中心である国内第二の都市レイがある一方、最寄りの道まで40kmという陸の孤島の様な村もある。

歴　史

フオン半島のボボンガラでは約4万年前の石器等や遺跡が発見されている。これは現存する記録の中でオーストラリアを含むオセアニアで最も古い人間活動の痕跡といわれている。

19世紀の後半、ドイツ人探検家のオットー・フィンシュは、フオン半島を航海した際に寄港した場所をフィンシュハーフェン（フィンシュの港　Finschhafen）と名付けた。その後1886年キリスト教ルター派のドイツ人宣教師ヨハン・フリエルらが、フィンシュハーフェン近くのシンバングSimbang に教会を建立し、ここからルター派教会はニューギニア島北部、後にハイランド地方一帯にまで広く布教されてゆく。

第一次世界大戦後、ワウ・ブロロ近くのエディ・クリークで金鉱が発見されゴールドラッシュが起こった。一攫千金を夢見た山師たちが次々と訪れる中でオーストラリアのクイーンズランドからやってきたレイ(Leahy)兄弟は、このエディ・クリークまで来たが、大きな金脈は既に大企業に押さえられていたので、金を求めてさらに奥地

ゴールドラッシュでオープンしたブロロの宿パインロッジ

へ進み、それまで原住民がいないと言われていたハイランド地方まで分け入り大集落に遭遇、これが大発見となり探検家としての名声を得た。

太平洋戦争では、日本軍は連合軍の基地であったポートモレスビー攻略を視野に入れて1942年3月にサラモアとレイを占領、ニューギニア島北岸戦線の航空基地とした。

その後、日本軍第51師団は1943年９月、ラエ・サラモアの戦いで敗れ、標高4000mを超えるサラワケット山脈からフオン半島の北部のキアリへ敗走したが、十分な食事、登山装備を持たなかったため多くの将兵が餓死、転落、凍死した（サラワケット転進）。その後も連合軍の反攻は容赦なく、日本軍はフィニステール山脈を縦走してマダン方面へ逃れた（ガリ転進）。

日本軍港のあったサラモア

産　業

州都レイはパプアニューギニアの産業拠点として、セメント、清涼飲料水、ビール、石鹸、塗料、化学製品、ガラス・金属製品加工業など多くの製造業が本社工場を持つ他、缶詰工場、砂糖、精米工場などの食品加工業、オイルパーム工場や製材工場、物流や船舶、運輸関連の会社事務所や倉庫が並ぶ。

特筆すべき事業では、レイの国内最大の鶏肉・鶏卵生産会社ゼナック・チキン(Zenag Chicken)、また日系では太平洋セメントがやはりレイで操業している。またワウで金や銀を産出するヒドゥン・バレー鉱山(Hidden Valley Mine)、その隣のブロロでは林業が盛んである。

さらに2020年6月現在、操業申請中であるワフィ・ゴルプ・プロジェクト(Wafi-Golpu Project)は、世界最大規模の金山採掘プロジェクトと言われ期待されている。

教育研究施設

レイには南太平洋で唯一の工科大学である国立工科大学（University of Technology ―通称ユニテック Unitech）があり、国を代表する企業などに優秀な人材を提供している。また電話局関係者の技術訓練を行うテリコム・カレッジ(Telikom College)もある。

ブロロには1962年から林業関係の職業訓練をするブロロ・フォレストリー・カレッジ

があったが、1995年に国立工科大学と合併し、ブロロ・ユニバーシティ・カレッジ(Bulolo University College)となった。

その他、研究機関としては森林研究所(Forest Research Institute :FRI)、国立農業研究所(National Agriculture Research Institute: NARI)など国を代表する研究機関の本部がある。

主な都市や街

レイ（LAE）

州都レイは人口約10万人、肥沃なマーカム川の河口に位置し、パプアニューギニア第二の都市にして国内最大の製造拠点で、高原地帯から延びるハイランド・ハイウェイの始点としての物流拠点で、国内外へ向けての積み出し港である。

熱帯雨林気候で最高気温は年間を通じて30度以上で蒸し暑く、年間降雨量は4500mmでパプアニューギニアの中でも極めて多雨な町のひとつである。年間を通じて雨が多く、乾季と言える月は無いが1月、2月のみ降雨量が300mm以下である。一方、6～8月は500mmを超える雨季で、河川の氾濫、浸水、橋の決壊などの自然災害が多くみられる。レイ市街から40キロ離れた内陸部のナザブに空港が移された背景にはレイ市街エリアの多雨による視界不良がある。なおナザブの年間降雨量は1500～1800mm、レイの1/3程である。

レイの中心街

現在のレイの場所はドイツ統治時代にはルター派教会の拠点があるだけで街さえなかったが、1920年代に近郊のワウ・ブロロで金鉱が発見されると滑走路（1980年代まで使われた旧レイ空港）が建設された。旧レイ空港からはブロロやワウの空港へ様々な物資が輸送され、1930年代初頭は世界屈指の貨物量を誇った空港といわれている。この滑走路と、積み出し港であるボコ・ポイントの間に住居が建てられたのがレイの街の始まりである。ちなみに現在でも庶民の船着き場として栄えるボコ・ポイント(Voco Point)のVocoの名は、かつてレイにも拠点を構えたバキューム・オイル社(Vacuum Oil Companyのちに合弁してエクソンモービル社)の名に由来する。

戦後、ハイランド・ハイウェイが開通してレイは物流の拠点としての重要性を増し、この国の二次産業の中心地として成長を続けてきた。

レイ周辺の見どころ、アクティビティ・イベント

レイ・ゴルフクラブ

Lae Golf Club

18ホールのゴルフコースがあるのは

レイ・ゴルフクラブ

ポートモレスビー、レイとマウントハーゲンだけで、レイのゴルフクラブでは毎年5月にモロベ・オープンが行われ、海外からの参加者もある。

レイ・ヨットクラブ

Lae Yacht Club

レイ・ヨットクラブは1961年開設で、ヨットやレジャーボートのオーナーが集う会員制クラブである。ラバウル、ココポ、ブーゲンビル、レイ、マダン、ポートモレスビーをローテーションするスポーツフィッシング競技会ナショナル・ゲームフィッシング・タイトル(National Game Fishing Titles)も行われており、海外からのエントリーもある。

レイ・ヨットクラブ

モロベショー

Morobe Show

毎年10月にはレイのショー・グランドで1959年から続く由緒あるモロベショーが開催される。

モロベ州における農業、園芸、畜産、産業、教育や文化のディスプレイや伝統舞踊などのイベントを交えた2日間のショーは地元の人にとっては欠かせない年間行事であると共に、パプアニューギニア各地のビジネス関係者や海外からの観光客が多く訪れる。

モロベショー

妙高丸

Myokomaru Wreck/Sipaia Village

レイの東、マラハン地区シパイヤ村にある日本軍の貨物船の残骸。

妙高丸は、太平洋戦争中の1943年1月、揚陸作業中に連合軍の爆撃を受け、火災を起こし船体上部をさらしたまま沈没した。レイ付近に残る戦跡として慰霊団などが訪問する。このシパイヤという村名は「燃えた船、Ship Fire（シップ・ファイア）」に由来する。

レイ付近にはこの他、日本軍基地のあっ

たルナマン山や野戦病院跡などの慰霊地・慰霊碑がある。

レイのホテル

レイ・インターナショナル・ホテル

Lae International Hotel（Tel：472-2000）

レイの中心街近くに建つ高級ホテル。広大な敷地に宿泊等が広がり、政府、民間企業の出張者、慰霊団を始めとする観光客の宿泊の他、長期滞在者用に、キッチンを備えたアパートメントタイプの部屋もある。

ナザブ空港へや有料送迎車で約1時間。

レイ・インターナショナルホテル

クロスロード・トランジット・ホテル

Crossroads Transit Hotel（Tel：475-1246）

ナザブ空港からレイへの途中、ブロロへのハイウェイの分岐点近くにあるホテル。

クロスロード・トランジット・ホテル

プール、フィットネスジムなどを備え、ブロロ近くのヒドゥン・バレーの鉱山関係者の宿泊が多い。ナザブ空港へは有料送迎車で約30分。

レイの交通

州都レイの空の玄関ナザブ空港はレイから約40キロ、車で1時間の内陸部にある。

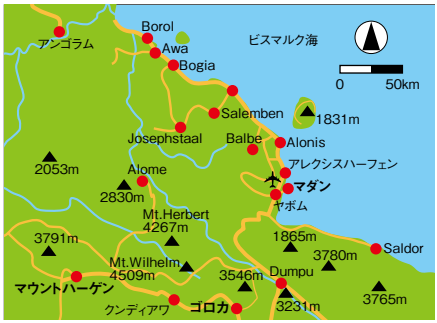
首都ポートモレスビーからナザブ空港へはニューギニア航空、PNGエア定期便で45分。その他マダン、ウェワク、バニモ、ホスキンス、マヌスなどへの便の経由地となっている。またノースコースト・アビエーション(North Coast Aviation)がナザブ空港をハブとしてモロベ州各地の小さな街や村を繋ぐコミュニティ航空会社として重要な役割を担っている。

一方レイは陸路も充実しておりパプアニューギニアの最重要基幹道ハイランド・ハイウェイ(Highland Highway)の始点であり、ゴロカ、マウントハーゲンと舗装路で結ばれている他、ラム渓谷経由でマダンとも繋がっている。ゴロカへはＰＭＶバスで所要時間7～8時間、料金は30～50キナ

「レイ・ブロロ・ハイウェイ」はレイ郊外の
9マイルから分岐しブロロやワウへ向う。

ナザブ空港

マダン州（Madang Province）



マダン州はニューギニア島北部ビスマルク海に面した州で、東はモロベ州、西は東セピック州と州境を接し、南部は険しい山岳地帯となってハイランド地方諸州と接する。国内最高峰4509mのウイルヘルム山の一部を始めとする数々の高峰、大河ラム川やラム大渓谷、沿岸には45の島々といった多様な土地をもつ。北岸のハンサ湾に浮かぶマナム島はその美しい姿からかつて日本軍将兵から「マナム富士」と呼ばれていたが、活火山の島でしばしば噴火を繰り返しており、2018年にも大きな噴火を起こしている。

このような地形の複雑さから、州内では175種の言語が使われており、これはパプアニューギニアの中でも突出して多いが、近年は共通語であるピジン語が広く普及したために、消滅してゆく言語も多くなっている。

歴　史

この地に最初に到達した西洋人として記録に残っているのがロシアの人類学者・生物学者のニコラス・ミクルホ=マクライで、マダン南岸のアストラベイ地区に15か月滞在し貴重なフィールド研究をすると共に、パイナップル、マンゴ、カボチャなど食用植物を持ち込んだとされる。

1884年ドイツニューギニア会社の探検チームによって「フリードリヒ・ウイルヘルムズハーフェン」と名付けられたが、ドイツ占領時代の終盤になって、同行していた原住民の出身地にちなんで「マダン」という名前が使われ出したようだ。ドイツニューギニア会社はコーヒー、タバコや綿

ドイツ人の墓

花のプランテーションを試みたが、入植者の多くがマラリアなどの疫病で亡くなったことから、1899年に本社をハーバースホー（現在のニューブリテン島ココポ）へ移すことになった。マダン中心地では今も当時亡くなったドイツ人の墓をみることができる。

1918年、第一次世界大戦でのドイツ敗北の後、マダンは国際連盟によりオーストラリアの委任統治領となった。太平洋戦争では日本軍が一時占領したが、連合軍との激しい戦闘の後、連合軍に奪還された。

日本軍の爆撃機の残骸

産　業

農業ではマダンはカカオとコプラの生産で全国3位、ラム渓谷を中心とする畜産（肉牛生産）はモロベ州に次ぎ全国2位。また食品加工を中心に国内大手企業が大規模な工場を展開しており、マグロ缶詰メーカーのRDツナ缶詰（RD Tuna Canners Ltd.）、主に肉の缶詰メーカーのジェイムス・バーンズ（James Barnes PNG Ltd.）、タバコメーカーのブリティッシュアメリカンタバコ（British American Tabacco PNG）、サトウキビに加えてパーム椰子のプランテーションや畜産を展開して総合食品生産業者となっているラム・シュガー（Ramu Agri Industries Limited）、中国系の資源会社ラムニッケル鉱山(Ramu Nickel Mine)などが操業し、雇用の受け皿となっている。なおラムニッケル鉱山は有害物質を含む大量の泥を垂れ流したため海が汚染され、2019年マダンの魚の捕獲・売買が禁止され地元民の生活に大きな支障をきたし、鉱山は一時操業停止に追い込まれた。

主な都市や街

マダン（Madang）

州都マダンは南太平洋の真珠とも呼ばれた美しい街で、クルーズ船の寄港も多く、スキューバ・ダイビング、サーフィンを含め、観光事業も大きな収入源となっている。

1998年に開校したカトリック系大学であるディバイン・ワード大学は国内最大規模の私立大学で、ジャーナリストや観光学部など社会科学系が有名な他、薬学部や看護学部も併設され総合大学へと変貌し

マダンの町

つつある。またニューギニア・ビナタン・リサーチ・センター(The New Guinea Binatang Research Centre)はノースコースト・ハイウェイにあるNGO研究機関で動植物など生態学の研究や保全を行っている。

熱帯雨林気候で年間降雨量は3000mmを超える。

最高気温は年間を通じて30℃前後で特に12～4月の雨季は蒸し暑く、雨量は300mmを超える。5～11月は乾季で特に8～9月の降雨量は100㎜に満たない。

マダンの見どころ・アクティビティ

マーケット

Madang Town Market

日本のODAにより改修され2016年にオープンした公設市場。

新鮮な海の幸、山の幸が並び、この地の名物オオコウモリが売られていることもある。

マーケット

沿岸警備記念塔

Coast watcher's Memorial

太平洋戦争中に活躍した旧連合軍の沿岸警備隊の活躍を祈念して建てられた灯台型の記念塔で、現地では「カリボボ・ライトハウス」と呼ばれ、マダンの州旗のデザインにも使われるなどマダンのシンボル的な存在。隣に生い茂る巨大なガジュマロの木も見もの。

沿岸警備記念塔

マダン博物館

Madang Visitors & Cultural Bureau/Haus Tumbuna

マダン観光局に併設された博物館。マダンの歴史や重要な交易品であった素焼きの壺、手彫りのカヌーなど興味深い展示を見ることが出来る。

マダンカントリークラブ

Madang Country Club & Golf course

マダンの海岸通りコロネーション・ドライブにある9ホールのショートコース。

テニスやローンボウルズの設備もあり、クラブハウスでは食事も出来る。

マダンカントリークラブ

バレクハビタット

Balek Habitat

マダンから南へ約10kmにある自然公園。熱帯ジャングルの中、石灰岩の岩から湧く硫黄泉の池にスッポンモドキや大ウナギが生息し、蝶々や昆虫なども観察することが出来る。1996年のピアーズ・ブロスナン主演のハリウッド映画「ロビンソン・クルーソー」のパプアニューギニアでのロケ地のひとつとなった。

バレクハビタット

●ダイビングとシュノーケリング＆ビーチピクニック

マダンリゾートホテルにダイビング＆マリンサービスがあり、日本人インストラクターが常駐している。ボートで15～20分のマダンリーフ沿いや沿岸警備記念塔沖の隠れ根、そしてノースコーストに沿って、ポイントが点在し、バラクーダやギンガメアジ、ハンマーヘッドシャークなど大物の他、太平洋戦争時の船や飛行機も見ることが出来る。またマダンリーフ沿いのクランケット島やピグ島などの美しい小島ではシュノーケリングやビーチピクニックが楽しめる。

●サーフィン

マダンから北へ2時間ほど、ノースコースト・ハイウェイ沿いのトゥピラ村に村営サーフロッジがある。わずか8室の簡素なロッジだが、目の前のビーチにはコンスタントに波が立ち、ここに滞在すれば朝から夕方まで波を独占するようにサーフィンを楽しめる。サーフィンシーズンは11月～3月で予約は1年前から埋まってゆくので早めがよい。

トゥピラサーフロッジ

マダンのホテル

マダンリゾートホテル

Madang Resort Hotel（Tel：4222655）

リゾートホテルとしては国内最大規模。街の中心地から車でわずか5分の海岸沿いに立地し、ビジネスセンター、大型会議場、プール、PADIダイブセンター、ツアーデスク等を備え、観光、ビジネスステイなどに対応。

マダンリゾートホテル

ジャイスアーベンリゾート

Jais Aben Resort（Tel：72480905）

マダン空港からノースコースト・ハイウェイを送迎車で15分のカジュアルなリゾート。

美しいナガダ湾に面しヤシの木に囲まれたコテージでリラックスするのに最適。

ジェイスアーベンリゾート

ナンビスイン

Nambis Inn（Tel：7634-0607）

マダン市街地近くの海岸沿いに建つ2018年に開業したビジネスホテル。

全31室がゆったりとしたダブルベッドの部屋、プール、フィットネスクラブを備え快適にステイできる。

ナンビスイン

マダンの交通

ニューギニア航空、PNGエアが定期便を持ち、首都ポートモレスビーまで1時間。その他近隣のウェワクやバニモ、レイへの航空路線もある。

また道路網では国内最大の幹線道路ハイランドハイウェイで隣接するモロベ州を経由してゴロカ、マウントハーゲンへ行ける。乗り合いバスのＰＭＶバスでレイへ向かう場合、所要時間7～8時間で運賃は60～70キナ、またマダンから海岸線を西のボギア方面まで通じているノースコースト・ハイウェイは、隣接する東セピック州まで延長される計画があり、またブンディからゲンボグ経由でハイランドへ上がる道を改修・拡張する計画もある。

東セピック州（East Sepik Province）

東セピック州はビスマルク海に面したニューギニア島北岸に位置し、東にマダン州、西はサンダウン州とウエスタン州、南は高地のエンガ州・ヘラ州と境を接する。

南部の中央山脈から発するエイプリル川、カラワリ川、ユアト川、ケラム川などが州を縦断するように南北に流れパプアニューギニアを代表するセピック川にそそぐ。セピック川は州の中央部を横断するように西から東へ走り、大河となって東の州境近くでビスマルク海に流れ込む。このため州の大半は半永久の湿地帯となっている。

州北部ではプリンス・アレクサンダー山地が海岸部を隔て、州南部には最高峰3700m級の中央山脈(Central Range)が走る。

セピック川流域の主食はサゴ椰子の澱粉を乾燥させた「サクサク」と呼ばれる保存食と川魚、ヤム芋などで、サクサク等の保存のため素焼きの土器が今でも多く作られ、使用されている。サクサクの食べ方は地方によって特色があるが、セピック川流域ではフライパン状の

カラワリ川奥の村

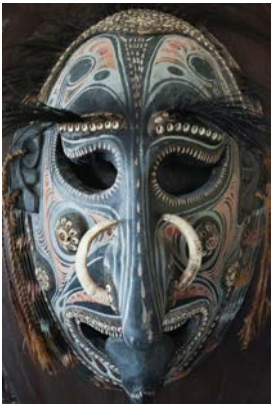
セピック川流域の村の民族衣装

サクサクのパンケーキ

トーテムポールとハウスタンバラン

補修中のハウスタンバラン

博物館に所蔵されている古いガラムート



木彫りのお面

素焼き土器に平たく伸ばして焼きパンケーキの様にして食べたり、ボール状に丸め魚と一緒に煮てスープにして食する「ナングー」が一般的である。

この地域ではキリスト教が普及した今でも伝統的な土着の精霊に対する信仰が強く、精霊の家「ハウス・タンバラン(Haus Tambaran)」がコミュニティの中心となっている村が多く見られる。ハウス・タンバランは精霊を祭る家であり、木彫りの仮面や木をくり抜いたガラムートと呼ぶ太鼓などが飾られ、村の重要課題を決定するための会議が開かれたり、数年に一度、成人の儀式も行われる。ハウス・タンバランの形状や大きさは地域によって大きく異なり、セピック川中流域ではパリンベに代表されるような2階建ての大型なもので、一方マプリック地方で建てられる三角屋根のハウス・タンバランは国会議事堂の正面玄関のデザインにも使われている。

セピック地方は「原始美術の聖地」とも呼ばれ、この地域で継承される木彫りの民芸品はプリミティブ・アートの傑作として世界の収集家、芸術家の注目の的となっている。

歴　史

貝などの化石や言語の共通性から、セピック川流域はかつて内陸部に食い込んだ大きな湾で、アフリカから移住してきた人類がビスマルク海からこの湾を通ってハイランド地方へ移住したという説が有力である。

ドイツ統治時代にこの地域を探検した探検家オットー・フィンシュは1885年セピック川を発見し、時のドイツ皇后アウグスタの名から「カイゼリン・アウグスタ」と命名した。ドイツ統治時代終了と共にこの名は忘れ去られ「セピック」と言う名前が広く使われるようになる。「セピック」

の名前の由来は地元言語の一つで「偉大な川」と言う説が有力である。

1913年にはセピック川下流のアンゴラムにドイツ領ニューギニアの街が建てられたが、これはセピック川流域では最も古く、大きな街であった。同じ頃、アンゴラム近くのマリエンベルグにはカトリック教会が建てられた。マリエンベルグには製材所も建設され、木材を川岸から製材所まで運ぶための鉄道も敷かれたという。

太平洋戦争では1942年３月に日本軍がこの地を占領し、1945年9月にウオム岬で日本軍が降伏するまで激しい闘いが繰り広げられた。特に「アイタペの戦い」で敗れた日本軍第18軍はウェワクへ後退し、残存部隊はセピック川に分散して散発的な戦闘を繰り返しながら部隊を維持したが、飢餓とマラリアで多くの将兵が亡くなった。

産　業

2000年、破壊的なサイクロンがバニラの世界的産地であるマダガスカルを襲った事から、バニラの世界相場がそれまでのキロ当たり約20ドルから約500ドルまで高騰した。これに乗じてマプリック地区を中心にバニラ栽培が始まり、現在では国内最大のバニラ生産地となっている。

またセピック州では、カカオやロブスタ種のコーヒーなどの商品作物の栽培も盛んである。ロブスタ種のコーヒーは病害虫に強く、熱帯低地での栽培に適しており、高地で栽培される高級なアラビカ種とは別にインスタントコーヒーなどに使われる安価な商品として需要がある。

台湾、オランダとパプアニューギニアの合弁企業であるサウスシー・ツナ・コーポレーション(South Seas Tuna Corporation Limited)はウェワク港脇に本拠地を構え、水揚げしたマグロを加工する工場を有し多くの現地人スタッフを雇用している。

鉱業では上流のフリダ川(Frieda River)で金鉱が発見されており、商業ベースの採鉱が計画されているが、環境面を懸念する声が多く、2020年6月時点で操業の許可は出ていない。

教育・研究機関

ウェワクにあるセント・ベネディクト教員養成学校は2003年からマダンに本校があるディバイン・ワード大学のウェワク校舎となり、教育学部が置かれる。

主な都市や街

ウェワク（Wewak）

ビスマルク海に面する東セピック州都で人口5万人。

ドイツ統治時代の1911年に現在のウェワクのウィルイ地区にカトリック教会が建てられ、翌年にはボラム岬、ウモエム岬、ブランディなどにココナッツのプランテーションが開かれた。これが現在のウェワクの街の始まりである。この時代に

ウェワクの町

Viaq（ヴィアク）と言う村と接触したドイツ人による聞き間違い、ドイツ式表記でWewäk(英語表記でWewaek)となり、その後eが外れてWewakとなったのがウェワクの名前の由来であると言われている。

ウェワクには空港、港湾施設、スーパーマーケット、銀行、病院、ヨットクラブ、ゴルフクラブなどがあり東セピック州最大の街となっている。

太平洋戦争の戦跡地・慰霊地としては、日本の平和公園、対空高射砲や民間建立の慰霊碑である「英霊の碑」が建つミッションヒル（洋展台）、連合軍の記念碑が建つウオム岬などがあり、2014年には安倍首相も慰霊に訪れた。

ウェワクは熱帯雨林気候で最高気温は年間を通じて30度以上で蒸し暑く、年間降雨量2200mm。12～3月が乾季で、5～10月は月間200mm以上の多雨となる。

英霊の碑

ウェワク周辺の見どころ、アクティビティ・イベント

平和公園
Japanese Peace Park

ウェワクの中心街近く、ボラム・ロード沿いに位置する日本政府の平和公園。

ニューギニア及び周辺海域で戦没したすべての人々の霊を慰めるため、昭和56年に「ニューギニア戦没者の碑」が建てられた。ここでは現在でも多くの慰霊祭が行われている。

セピック川
Sepik River

独自の部族文化を残す秘境、原始芸術の宝庫として欧米人を中心として毎年多くの観光客が訪れる。ウェワクから陸路でセピック川にアクセスして船外機付きのカヌーで村々を巡るアドベンチャー・スタイルか、チャーター機で支流のカラワリ川の高級ロッジや豪華客船で巡るスタイルが標準的。後者の場合はマウントハーゲンが拠

点となる。

クロコダイル・フェスティバル

Sepik River Crocodile & Arts Festival

ワニ（クロコダイル）はセピック川流域に広く生息し、力の象徴として先祖と崇める部族も多い。成人の儀式でもワニの鱗のような模様が背中に彫り込まれ、ワニを模したコスチュームで踊るシンシンも多くある。

毎年8月上旬にアンブンティで行われるこの祭典ではセピック川流域のワニの重要性や生物多様性をハイライトし、珍しい部族による民族舞踊を目当てに世界から観光客が訪れる。

クロコダイル・フェスティバル

ウェワクの宿泊

イン・ウェワク・ブティック・ホテル

In Wewak Boutique Hotel（Tel：456-2100）

ビスマルク海を見下ろすウェワクヒルにあるホテル。

有料空港送迎、Wi-Fi、プールなどを備え、ビジネス、観光、慰霊などに広く利用される。

パラダイス・ニューウェワク・ホテル

Paradise New Wewak Hotel（Tel：456-2155）

ウェワクヒルに建つ老舗のホテル。長年にわたって日本人経営で現在は二代目のオーナーとなっている。慰霊巡拝団や遺骨収集事業の受け入れ、学術研究者によるフィールド調査のサポート等を行ってきた。新鮮なシーフードを使った料理や和風の食事が評判。

パラダイス・ニューウェワク・ホテル

ウェワクの交通

ウェワク・ボラム空港からはニューギニア航空、PNGエアの定期便があり、首都ポートモレスビーへは直行便の他、マダンやレイなど経由便もある。

MAF(Mission Aviation Fellowship)はキリスト教団系の航空会社でウェワクを

ウェワク空港

ベースに小型のセスナ機を運行し、陸路では行けない小さな村へ飛んでいる。

内陸部のカラワリ支流の滑走路には、カラワリロッジを訪れる観光客のためにトランスニューギエアーのチャーター機がハウントハーゲンから発着している。

道路網はウェワクを中心として放射状に延びている。ウエストコーストハイウェイがウェワクから西の海岸部をサンダウン州のアイタペまで繋いでおり、アンゴラム・ハイウェイは、セピック川下流の街、アンゴラムへ、セピック・ハイウェイはマプリックを経てセピック川中流域のパグイまでそれぞれ走っている。またセピック川流域では陸路はなく、カヌーによる移動が一般的だ。

サンダウン州（Sandaun Province）

サンダウン州はパプアニューギニアの北岸最西に位置し、インドネシアとの国境を接し、東は東セピック州、ヘラ州の一部と、そして南部はウエスタン州と接する。州の大半は低地の熱帯雨林であるが、南部のスター山地では4000mの山もある。この山岳地帯はパプアニューギニアを代表する2つの大河（フライ川とセピック川）の源流があり、以前は西セピック州と呼ばれていた。

州名のサンダウンは英語sun down（太陽が沈む）のピジン語に由来しており、PNGの最西に位置し、パプアニューギニアで最後に陽が沈むことから名付けられた。公用語の英語、共通語ピジン語とローカル言語（95言語）の他、国境の町らしくインドネシア語（バハーサ・インドネシア）を理解する人間も多いのが特徴。

インドネシアとの国境

バニモ周辺の沿岸部には11月～4月のモンスーンシーズンにフィリピン沖からコンスタントなうねりが到達し絶好のサーフィンスポットとなり、毎年オーストラリアや日本からサーファーが訪れる。

絶好のサーフィンスポット

作家の有吉佐和子が文化人類学者の畑中幸子との旅を描いた「女二人のニューギニア」はサンダウン州南部のテレフォミン地区のオクサプミンを舞台とした傑作エッセイである。

歴　史

20世紀の初め、この地を支配したドイツはアイタペに街を作り、ヨーロッパと交信するための無線ラジオ局などを建てベルリンハーフェン（「ベルリンの港」）と名付けた。

太平洋戦争時には1944年、アイタペ東方のドリニュモール川河畔で「アイタペの戦い」と呼ばれる激しい戦闘が行われている。

また1998年7月17日アイタペの西方の沿岸部のシサノ・ラグーン沖合50km付近でM7の大地震が発生し、沿岸30km内

陸へ1.5kmの範囲で最大15mの津波が押し寄せ、死者・行方不明者2200名の大災害（アイタペ津波）となり、日本からも援助が入った。

産　業

主な産業は林業で、国内最大規模の伐採地域を持つマレーシア系のバニモ・フォレスト・プロダクツ(Vanimo Forest Products)などにより丸太の輸出が行われている。

主な都市や街

バニモ（Vanimo）

モンスーン風の季節には大きな波が押し寄せるサンダウン州の海岸線にあって、唯一自然の港として年間を通じて船の係留が可能な場所であったバニモが州都になった。インドネシア国境から32kmに位置するバニモは、突き出た岬の根元付近に空港と港湾設備があり、その周辺に行政施設や銀行、スーパーマーケット、サンダウン州の主産業である林業会社の事務所や製材所が並ぶ小さな街である。

熱帯雨林性の気候で最高気温は年間を通じて30度を超え、200mm/月以上の雨が降る。年間降雨量は2600mmに及ぶ。

バニモのホテル

バニモビーチホテル

Vanimo Beach Hotel（Tel：457-1102）

バニモの街の中心部の海岸沿いに建つホテル。

バニモビーチホテル

レストランではアジア系の食事を食べる事ができる。

バニモ・サーフロッジ

Vanimo Surf Lodge

バニモ空港から車で15分のリド村に建つサーフィン専用のロッジで宿泊は食事、サーフィン・レビーなど込みでツアーの一環として申し込む必要がある。

ベッド4台のバンガローが4棟のみで最大16名までがステイし、混雑とは無縁の波を存分に楽しめる。

バニモ・サーフロッジ

バニモの交通

ニューギニア航空、PNGエアが首都ポートモレスビーへの定期便を運航している

が、ウェワクやマダンを経由する便が多い。

道路網では州都バニモ(Vanimo)から西のインドネシア国境に接するウトゥンまでの道路は繋がっているが、州東部の町アイタペとの間に道路は無く、一方アイタペは東に隣接する東セピック州の州都ウェワクまで道路が通っている。バニモからウトゥンまで車で1時間、ウトゥンの国境からインドネシアのジャヤプラまで約2時間。内陸部の町テレフォミンへもバニモからの道路はないが、隣接するウエスタン州のオクテディ鉱山まで道があり、テレフォミンの住民が鉱山関係の仕事に携わっていたり、オクテディ鉱山へ食料を供給したりしている。

ニューギニア島山岳地域（Highlands Region）

西ハイランド州とジワカ州（Western Highlands Province / Jiwaka Province）

ニューギニア島の国土中央部に位置し、ウイルヘルム山（4509m）やギルウェ山（4367m）などの最高峰の山々に囲まれ、ワギ、バイヤー、ネビリヤーなど多くの渓谷地帯が存在する。これらの肥沃な土地と豊富な雨量に恵まれ、高原野菜やコーヒーなどの農産物の生産地としても名高い。

かつての西ハイランド州の人口は、南ハイランド州に次いで全国2位であったが、2012年にジワカ州として一部が分離した結果、西ハイランド州の人口は約36万人、ジワカ州は約34万人となった。

この２州には10の言語があり、その1/3はメルパ語を話すメルパ族である。メルパ族の民族衣装の特徴は、極楽鳥、インコ、フクロウなど色とりどりの羽根飾りに、顔全体に派手なペイントをすることだ。

歴　史

ワギ渓谷の中に位置する肥沃な湿地地帯であるクック湿地帯（Kuk Swamp）には、約2万年位前から人が住み始めたと言われている。この地域では少なくとも9000年前には灌漑設備の整った農業が行われていたことが明らかになっている。これは現在までに判明している中で、メソポタミア文明や黄河文明に匹敵する、人類史上最も早い農業の痕跡であり、「クック初期農業遺跡」として2008年にユネスコの世界遺産に登録された。尚この遺跡は、保護のため埋め戻されており、残念ながら現在は見学できない。

クク遺跡エリアは現在、埋め戻されている

今も変わらない側溝を掘る農法

この地域は、今日でも肥沃な湿地帯であり、深さ2－3mの側溝が畑を囲むように掘られ、おそらく9000年前と大きく変わらないスタイルの農業を営んでいる。

1933年、最初に西洋人としてこの地に入ってきたのが、オーストラリアの植民地統治官のジム・テイラー（Jim Taylor）

と金鉱を求めて高地を探検していたレイ(Leahy)兄弟である。飛行機で到着した彼らと現地人との遭遇の様子はレイにより詳細に記録され、書籍「ファースト・コンタクト」やドキュメンタリービデオで見ることが出来る。

また翌1934年には、カトリックの宣教師が入ってきて、布教に努めた。

1950年代には入植してきた西洋人によって、コーヒーのプランテーションが作られたが、輸出の為の産業道路が無く、当時はマダンまで空輸されていた。1960年代になってハイランド・ハイウェイが開通し、商業、物流が発展するきっかけとなった。

2012年、アングリンプ＝南ワギ、北ワギ、ジミの3つの行政区がジワカ州として西ハイランド州から分離独立した。なおジワカ州の初代知事には文科省留学生として日本で博士号を取り、秋田大学で準教授として教鞭を取っていたウイリアム・トンガンプ氏が当選し、2020年7月現在も知事である。

産　業

西ハイランド州・ジワカ州はパプアニューギニアの中で最大の農業地帯であり、マウントハーゲンはハイランド・ハイウェイの中継地にあるという地理的条件を生かして運送・物流会社の拠点が置かれ、これらの産業を支える金融ビジネスも盛んで、ハイランド地方の中で最大の産業基盤を持つ。

世界でも最古の農業遺跡が見つかった事からも分かるように、この地域では肥沃な渓谷の湿地帯を利用しての農業は太古から盛んであった。

交通インフラが発達した事で、現在では自給自足用の食料の他に、さつまいもを中心としてキャベツ、ニンジン、ジャガイモ、タマネギなどの商業野菜の栽培もかなり盛んで、ハイウェイを利用してレイまで運んで船で運ぶ他、ポートモレスビーまで空輸する事もある。

コーヒー豆の栽培には、気候と標高、水はけの良い土地などが必要であるが、それらが全て適合しているこの地域は、国内で最大のコーヒーの生産高を誇る。

また、ワギ渓谷には、カーペンター・エステート社が所有する4つの紅茶の大型プランテーションと工場がある。このプランテーションや施設は、1960年代にそれまではヨシの生息する湿地帯を干拓して作られた。ここで生産される紅茶がパプアニューギニアで一番有名な「No.1 ティー」である。

主な都市や街

マウントハーゲン（Mount Hagen）

標高1700mに位置する西ハイランド州の州都マウントハーゲンの人口は約3万人、国内第4番目の人口をもつ都市である。町の名前はドイツ領ニューギニアの知事を務めたカート・フォン・ハーゲンに

ちなんだマウントハーゲン（ハーゲン山3791m）に由来する。

ニューギニア島北岸のマダン、レイからの伸びるハイランド・ハイウェイの最大の中継地であり、ここから南ハイランド州、ヘラ州へと続く道路と、エンガ州に行く道路の分岐点に位置している。このような地理的条件もあり、マウントハーゲンはハイランド地方屈指の都市として、商業、物流、交通の一大拠点となっている。

最高気温は年間を通じて25度を超える事は無く、朝晩は涼しい。特に6～8月は最低気温が10度を下回る事も多く、山間部では防寒着が必要となる。年間降雨量は2500mm、12月から4月にかけて200mm以上の雨が降る雨季となり、がけ崩れなどの自然災害が多発する。

マウントハーゲンのみどころ・アトラクション・イベント

マウントハーゲン・マーケット
Mt Hagen Market

2007年にオーストラリア政府の援助によって、リニューアルオープンした。カラフルな野菜や果物など、売っている物の種類の多さ、量、値段、どれをとっても、ハイランド地方で最大のマーケットといえる。

マーケット

マーケット

マウントハーゲンショー
Mt Hagen Show

毎年、8月の第3週の週末に行われる部族の祭典。ハイランド地方を中心として、例年50以上の部族が集まり、その伝統的な衣装や踊りを競い合う。ゴロカショーと並び「ハイランド・シンシン・ショー」として世界的に有名で、多くの観光客を集める。

マウントハーゲンショウ

●バードウォッチング

マウントハーゲン周辺には多くの野

鳥が存在する森が異なる標高で散在するため、様々な標高の野鳥を観察できる拠点として、世界から野鳥愛好家を集める。ここではフキナガシフウチョウ、オジロオナガフウチョウ、アオフウチョウ、コフウチョウなどの極楽鳥を観察したい。ただし森には必ず地主がおり、入村料のアレンジや安全上の観点からも信頼できる旅行会社を通じて現地ガイドと行動する事が必要。

マウントハーゲンのホテル

ハイランダーホテル

Highlander Hotel（Tel：542-1355）

コーラルシーホテルのチェーンの一つで部屋数89室。空港から車で約10～15分。マウントハーゲンのタウンに位置し、ビジネス客の利用も多い。

無料送迎、プール、ジム、無料Wifiあり。

ハイランダーホテル

ロンドンリッジ

Rondon Ridge（Tel：542-1438）

部屋数　12室。

国内で各種リゾートを運営する旅行会社トランスニューギニツアーが管理運営する

ロンドンリッジ

ホテルで、空港から片道１時間位ほど、町を見下ろす眺めの良い高台にある。自然散策ツアーやカルチャーツアーもアレンジしてくれる。

マクロイヤルホテル

McRoyal Hotel（Tel：7905-7602）

2015年に空港近くにできた29室の新しいホテル。レストラン、バー、300名以上を収容する会議室を備える。空港送迎あり。

マクロイヤルホテル

マウントハーゲンのホテル

マウントハーゲンのカガムガ空港は中心街から車で15分程。ニューギニア航空とPNGエアが首都ポートモレスビーから毎日2～3便の定期便を運航している、飛

行時間は約1時間。さらにウェワクや、鉱山の街タブビルやキウンガへの定期便もある。

その他、地域航空会社で宗教団体系のMAF社、鉱山関係会社などのチャーター便を運航するヘビーリフト社、僻地にある自社のロッジへ観光客を運ぶTNエアー社などの航空会社が本拠を持つ。

道路網ではハイランド・ハイウェイを使い、マウントハーゲンから隣町ゴロカへはPMVで5 ～ 6時間、レイへは12 ～ 14時間、またマダンへは14 ～ 16時間かかる。尚マウントハーゲンからバイヤを通ってマダンまで抜ける道路も建設中で、完成すればマダンまで大幅な時間短縮になる。

東ハイランド州（Eastern Highlands Province）

東ハイランド州は東のモロベ州、西のチンブー州、南のガルフ州、北のマダン州、と東西南北を他州に囲まれた内陸州で、多くの町は1500m以上の高地にあるが、州北部のラム渓谷やマーカム渓谷は標高数百メートルと低くなっている。北のビスマルク山脈など2000～3000m級の高い山脈に囲まれ、アサロ渓谷など大小さまざまな渓谷地帯がある。州の人口は約58万人（2011年国勢調査）で言語は約20種ある。ハイランド地方の中では海岸部に最も近かったため、西洋人との交流から比較的早く西洋文明を取り入れてきた州である。

東ハイランド州

ハイランドハイウェイ最高度2478mのダウロ峠

ハイランド・ハイウェイ沿いにあるラム川に建設されたヨンキ・ダムは、国内最大規模の水力発電所で、ハイランドの各州、モロベ州、マダン州に電力を供給している。また現在でも日本政府の技術協力により発電規模の拡大を図っている。

ゴロカの南西50kmにあるクレーター・マウンテンは、ガルフ州、チンブ-州と交差する地点であり、2700km^{2}の広大な自然保護区がある。この保護区ではゴロカに本部を置くNGO調査保護基金（Research and Conservation Foundation）が自然保護のための調査・研究・教育の活動を行っていたが、この地域で金や銅が発見され、2014年12月からクレーター・マウンテン鉱山の操業も始まり、地元住民は鉱山開発と自然保護の間で揺れ動いている。

東ハイランド州の各地にはノーコンディ（Nokondi）という精霊伝説がある。

一説には、海岸沿いの低地から来た西洋人を精霊と見間違えた、との話もあるが、この精霊の姿は、半分精霊、半分人間で、目、鼻孔、耳、手、足が各１つまたは１本しかなく、山奥に姿を隠

ゴロカの街中に建つ
ノーコンディの像

していると信じられているが、州旗の中心に描かれたり、ノーコンディ杯といったスポーツ競技のタイトル名に使われたりと、今でも州のシンボル的な存在となっている。

オカパ郡の南フォレ地区ではかつてクールー病と名付けられた謎の病気が広がっていた。1976年ノーベル生理学・医学賞をとった事で知られるアメリカ人の学者カールトン・ガジュセックが研究したところ、この土地の人肉食習慣が原因で広がった病気であることを発見した。この地区の人々は、亡くなった親族の肉を食べる葬儀習慣があったが、人の脳みそ内のプリオンという異常タンパク質がクールー病の原因だと判明した。なお、今では食人習慣もなくなり、病気も根絶されている。

歴　史

アサロ渓谷の南に位置するルーファー郡のカフィアヴァナKafiavanaの岩の洞窟に先史時代の壁画が残っており、少なくとも約1万1千年前には、人がこの地域で狩猟生活をしていたであろうことが判明している。1929年にはルター派教会の宣教師が、西洋人として初めてこの地に足を踏み入れた。その後1932年に植民地統治官のジム・テイラーによって、カイナンツに初めて滑走路が作られ、オーストラリア政府の出先機関が設置された。

太平洋戦争では連合軍の補給基地となり、1942年には連合軍の滑走路があったベナベナは日本軍による爆撃を受けた。1946年にゴロカは沿岸部のマダンに最も近い事から、ハイランド地方の行政の中心となった。

1950年代にゴロカとレイを結ぶハイウェイが開通し、産業道路としてのハイランド・ハイウェイの利用が始まると共に、商品作物の栽培が始まった。それまでモロベ州のワウなどで栽培されていたコーヒーの苗木が持ち込まれ、カイナンツやゴロカ周辺でも栽培を始めたのが、現在のコーヒー産業の始まりである。

ハイランド・ハイウェイ

産　業

主要な産業はコーヒーだが、大規模プランテーションではなく、村人が自分の土地にコーヒーを栽培し、業者が買い取る形が主体である点で、プランテーション栽培が盛んな西ハイランド州とは対照的である。なおコーヒー豆の生産では東ハイランド州と西ハイランド州が双璧となってこの国のコーヒー豆生産の40%近くを占める。

その他には、養鶏、養豚などの家畜の飼

コーヒー焙煎工場

ゴロカ大学の施設

育、ハチミツをつくる養蜂や高原野菜などの栽培も徐々に普及している。しかし生産者は自給自足に現金収入を補足する目的で商品作物の栽培を行っている村人が大半で、大規模農家やプランテーションというのは殆ど存在しない。

カイナンツにはK92マイニング社(K92 Mining Inc.)の金鉱山があり、周辺の川でも砂金が取れるので、個人の多くが採鉱しているが、カイナンツやゴロカにはそれを買い取る仲買人ビジネスもあり、小規模ながら州経済の一翼を担っている。

教育研究施設

ゴロカにはゴロカ大学 (University of Goroka)がある。発祥はゴロカ・ティーチャーズ・カレッジと言う教員養成学校だったが、1997年に大学となり、現在は大学院も備えた国内最大の教育指導にかんする教育・研究機関となっている。

ゴロカにはその他にも国を代表する研究機関が多く設置されている。PNG医療調査研究所（PNG Institute of Medical Research)ではマラリアなど風土病の研究が行われているが、国立の病理検査施設として、2020年のコロナウイルスの世界的な感染ではこの国のPCR検査が行われた。国立映像研究所（National Film Institute）は映像関係の研究を行う他、海外からの撮影許可なども取り仕切る。その他、メラネシア地域の文化の研究や出版を行うメラネシアン研究所（The Melanesian Institute)、国立スポーツ研究所（National Sport Institute)、この州の特産品であるコーヒー豆についてはその研究、出版の他、農家の教育、販売促進を担う機関としてコーヒー産業協会（Coffee Industry Cooperation）がある。

ゴロカ以外ではカイナンツの近くのウカルンパに、エス･アイ･エルSIL（Summer Institute of Linguistics）というキリスト教関連団体の施設がある。エス・アイ・エルではキリスト教の聖書を現地語に訳す活動を1956年から行っており、小型飛行機やヘリコプターを保有して山奥の村落に入り、地道な活動を続けている。ウカルンパには約600名の様々な国からのスタッフが住み、アメリカから輸入した商品を販

売するスーパーマーケットや、北米の教育カリキュラムを教えるインターナショナル・スクールを運営している。エス・アイ・エルは、現地語研究を行う研究者にとっても、重要な資料を提供する機関としての役割も担う。

主な都市や街

ゴロカ（Goroka）

東ハイランド州の州都ゴロカは人口約2万人の地方都市である。

ゴロカの名前の由来は、地元言語ガフク語(Gahuku)のコロカKolokaからきており、“夜明け”を意味する。

ゴロカの街の中心に位置する空港の滑走路は、太平洋戦争当時に、北部海岸沿いに駐屯する日本軍に対して実際より大規模の軍隊が駐屯しているように見せかけるために作る予定だったが、ここを見たアメリカ軍は、「実際に北海岸の日本軍基地を攻撃するのに最適な場所」と判断し、1000名以上の地域住民と協力し、滑走路は7日間で完成した。この滑走路を中心に町が作られ現在に至っており、今日でもゴロカ空港が

ゴロカの町

滑走路（右）とゴロカの町

町の中心に位置している。空港の北側に政府、銀行、スーパーマーケット、ゴロカ・マーケットなどの市街地があり、西は病院、学校、住宅地など、東側のエアポートロード沿いにはコーヒー関係の会社が並ぶ。

気候は年間を通じて温暖湿潤で、「永遠の春」と呼ばれる。

最高気温は年間を通じて25度を超える事は無く、6～8月は最低気温が10度近くまで下がる事から朝晩は涼しい。年間降雨量は1900mm、12月から4月にかけて月間200mm以上の雨が降る雨季となり、6月から9月は月間降雨量が100㎜未満の乾季となる。

街中では様々な工芸品が売られている

ゴロカ周辺の見所・アクティビティ・イベント

アサロマッドマン
Asaro Mudman

全身を白い泥で覆い、泥で作った大きなマスクを被って歩く姿は、不気味でもあり、滑稽でもあり、観光客にはとても人気のある部族だ。

アサロマッドマンの始まりには諸説があるが、一番有名なものは、「アサロの村人が敵対する部族に追い立てられ、逃げるうちに泥の中で転んでしまい、全身に泥がついたが、その姿を見た敵が亡霊が出たと思い込んで退散した」、という説だ。1957年に初めて開催されたゴロカショーにて脚光を浴び、現在では東ハイランド州のみならず、国を代表するアイコンの一つとなっている。

アサロマッドマン

マッカーシー博物館
JK. McCarthy Museum

オーストラリア植民地時代の管理官としてゴロカに住んだジョン・ケイス・マッカーシーの寄贈によりできた博物館で、現在は国立博物館となっている。西洋人が入植してくるまでの民族的な衣装、飾りなどの他、武器などの展示もある。また、西洋人と初めて接触した頃の写真も多く展示されていて、興味深い。

マッカーシー博物館

ゴロカ・マーケット
Goroka Market

ゴロカの人々にとって、市民の台所となっている青空市場である。サツマイモ、キャベツ、ニンジンなどカラフルな野菜が所狭く並べられ、売り買いをする人々で賑わう。

しかし、屋根やコンクリートの床がほとんどなく、長年にわたり、雨が降ると泥の中を歩かなければならないという状況だった。2020年には2階建てのマーケットが新築され、使用開始が待たれる。

新しくなったマーケット

ラウンラウン・シアター
Raun Raun Theatre

ゴロカのアイコンとしても知られている国立劇場で、1980年代に建てられ、PNGの文化継承の象徴となってきたが、近年、資金調達が難しく、存続の危機に陥っていた。しかし2019年、政府から資金が出て、リニューアルオープンを目指して改修中である（2020年6月現在）。

ラウンラウン・シアター

ゴロカショー
Goroka Show

長年、部族闘争で対立していた村人同士を融和させる目的で、各地に配されたキアップと呼ばれるオーストラリア人の行政官が担当の地域の農作物と部族を紹介するイベントとして企画され、1957年に第１回が

ゴロカショー

開催された。当初は東ハイランド州各地のキアップたちのみが紹介するイベントだったが、近年ではハイランド諸州だけではなく遠く沿岸部の部族も集まる、国内最大規模の民族の祭典となっている。毎年9月、独立記念日に近い週末に開催されるこのイベントは地元の人たちも楽しみにしており、9月が近くなるとどこからともなく、歌声が聞こえてくる。

マウント・ウイルヘルム登山
Mt Wilhelm

パプアニューギニア最高峰のウイルヘルム山(4509m)は隣接するチンブー州にあるが、航空便や拠点となるホテルなどの利便性から、ゴロカ発着のツアーがおススメだ。

ツアーはゴロカ発着3泊4日。技術的には難しい山では無いが、頂上が最後まで見え

ウィルヘルム山トレッキング中腹

ウィルヘルム山トレッキング山頂

ずアップダウンを繰り返すので精神的にはきついと言われる。高度障害には気を付けたい。

ゴロカのホテル

バード・オブ・パラダイス・ホテル

Bird of Paradise Hotel（Tel：532-1144）

街の中心に建つ老舗ホテルで、エリザベス女王も宿泊したことがあるゴロカのアイコン的な宿泊施設。無料空港送迎、無料Wi-Fi、ジム、プール、スカッシュコートがある。52室。

ホテル内のゴロカ・トレック＆ツアーズではゴロカ周辺のツアーやウイルヘルム登山などを催行する。

バード・オブ・パラダイス・ホテル

パシフィック・ガーデンズ・ホテル

Pacific Gardens Hotel（Tel：532-3418）

ゴロカタウンの北の森の中にある宿泊施設。空港から僅か10分の近さであるが自然豊かで静かな立地である。敷地が広く、敷地内の他の建物は、ほとんどが賃貸家屋である。レストランも、オープンスペースになっており、野鳥のさえずりや虫の声も聞こえながら食事ができる。無料空港送迎、無料Wi-Fi、プール、散歩コースがある。

パシフィック・ガーデンズ・ホテル

ホテル・フェニックス

Hotel Phoenix（Tel：532-3455）

ゴロカ空港の東側のエアポートロード沿いに建つ、2016年に開業した新しいホテル。以前は「ステーキハウス」と言われるレストランであったが、近年、ホテル経営

ホテル・フェニックス

にも乗り出した。無料空港送迎、朝食込み、プール、会議室を備える

ゴロカの交通

首都ポートモレスビーからゴロカへはニューギニア航空やPNGエアが、毎日2便ずつの定期便を運航している、飛行時間は約1時間。道路網は国内最大のハイランド・ハイウェイが州を横切るように通り、ゴロカは海岸沿いの街とハイランドの各町を繋ぐ中継点になっている。レイまで車で6～7時間、マダンまで8～9時間ほどで到達する。西はクンディアワまで2時間、マウントハーゲンまで5時間ほどかかる。

新しくなったゴロカ空港

ヘラ州（Hela Province）

ヘラ州は北を東セピック州とエンガ州、東南部を南ハイランド州と接し、西はウエスタン州と接する内陸の州で、多くの町は標高1500m以上の高地にある。

2018年2月26日にヘラ州を中心にマグニチュード7.5の地震が襲い、がけ崩れなどで大きな被害を出した。この影響でコモ空港の滑走路に亀裂が入り、LNGの生産も一時中断する事態となった。

またヘラ州最大の部族はフリで、フリはハイランド州各地、レイやポートモレスビーなどへ移住した人も含めるとパプアニューギニアで最大数の部族でもある。

歴　史

この州はかつて独立以来メンディを州都とする南ハイランド州の一部であった。

祖先「ヘラ」を始祖とする部族は、その子供たちであるオペネ、フリ、ドゥナ、トゥグバ、ヘワの部族に分かれ各地へ移住し、タリを中心とする地域、マガリマ、コピアゴ湖周辺、エンガ州一帯、ウエスタン州やセピック州の一部にまで広がっていった。

この部族の歴史から、この地域一帯に住むヘラの部族たちは互いに兄弟としての認識を持ち、「ヘラ」の国として独立したいと長く間願っていたが、ついに2012年、南ハイランド州の西部を中心にヘラ州として独立した。

産　業

1987年にハイズ(Hides)ガス田が発見され、1991年に生産が開始された。

当初、この天然ガスは隣接するエンガ州のポルゲラ金山の電力供給に使われたが、2000年代初めにはオーストラリアのクイーンズランド州へパイプラインを繋いでガスを供給・販売する話が持ち上がっては消え、最終的に米国エクソンモービル社がこの地域で生産されるガスを陸上300km、海底400kmのパイプラインによりポートモレスビー近郊まで輸送し、独自に建設するLNG（液化天然ガス）プラントでLNGを製造・輸出する事を決め、PNG LNGプロジェクトとして事業化が決定した。

2014年4月に生産が開始されたLNGの生産は年間800万トンの生産能力を有し、販売契約のうち約50%が日本向けである。またエンガ州との州境にはマウント・カレ金山もある。

一方、伝統的にサツマイモの栽培、養豚や養鶏での自給自足の生活を送ってきたヘラの人々の生活は、現在でも大きく変わっていない。商品作物の栽培としてはコーヒーに加え、マガリマ地区では除虫菊の栽培も行われている。

主な都市や街

タリ（Tari）

州都タリは標高1600mに位置する人口約1万人の地方都市である。空港近くには州政府、銀行、商店、ゲストハウスなどがあるが、小さな町を出れば伝統的な生活を営む農村部となる。タリの家屋は部族抗争に備えて大きな溝と粘土で固めた高い土塀が特徴的である。タリとその周辺に住むフリ族の男性はその特徴的な黄色いフェイスペイントとカツラで「フリ・ウイッグマン」としてパプアニューギニアの代表的な民族の一つとして世界に知られるアイコンとなっている。最高気温は年間を通じて25度を超える事は無く、朝晩はさらに涼しい。年間降雨量は2700mm、6月から8月は月間降雨量が200㎜を切る乾季となる。

タリ周辺の見所・アクティビティ

フリ・ウイッグマンの村

Huli Wigmen

伝統的なフリ族の村では少年は髭が生える年頃になると「カツラ学校」に入る。

ここではおよそ6か月～1年を掛けて自分の髪の毛を伸ばし、祭事用や日常使用するものなど、長い年月を掛けて複数のカツラを作る。フリ族は祝い事の際にクンドゥ太鼓のリズムに乗り、集団で跳躍しながら極楽鳥の求愛のダンスを模し踊る。ウイッグマンの村を訪ね、これらの独自の風習や踊りを見学するツアーはこの国で必見のひとつ。

フリ族

タリのホテル

アンブア・ロッジ

Ambua Lodge（Tel：542-1438）

タリ空港からハイランドハイウェイを40分、標高2100mに建つ高原リゾートロッジ。

アンブア・ロッジ

タリ渓谷を見下ろす丘にバンガローが並び、雲上からの景色は幻想的。

フリ・ウイッグマンの村や野鳥観察などツアーを含めた宿泊パッケージが人気で欧米を中心に観光客が訪れる。

タリの交通

タリ空港へはニューギニア航空やPNGエアが、首都ポートモレスビーから約１時間の飛行時間で定期便を飛ばしている。またハイズガス田に近いコモ空港はLNGプロジェクト建設に関わる資材運搬やスタッフの移動の為に整備され、エクソンモービル社などによるチャーター便が発着している。

タリ郊外のリゾート、アンブアロッジ脇にはアンブア滑走路があり、マウントハーゲンから観光客用の定期チャーター機が発着する。

道路網はハイランド・ハイウェイが南ハイランド州のメンディを経由してヘラ州へ入り、タリを通って北西の州境に近いコピアゴ湖まで延びている。タリからマウントハーゲンへは車で8 ～ 9時間かかるが、部族間抗争地域などもあるので旅行者にはおすすめできない。

タリ空港

島しょ地域（Islands Region）

西ニューブリテン州（West New Britain Province）

パプアニューギニアの中でニューギニア島に次いで面積の大きなニューブリテン島の西半分を占める西ニューブリテン州は、火山とパーム椰子の州と言える。

西ニューブリテン州には20を超える火山があるが、現在でもそのうち少なくとも4つが活火山である。

パーム椰子プランテーション

2002年のパゴ山噴火では州都キンベの空の玄関ホスキンス空港が一時閉鎖され、使っていなかったタラセア空港を急遽改修して代用として使用した。また最近では2019年6月にウラウン山が噴火し巨大な噴煙を吹き上げた。しかしこの火山灰によってもたらされる肥沃な土地と豊富な雨量はパーム椰子の栽培や森林の生育に最適な環境となっており、オイルパーム（パーム油をとる油椰子）のプランテーションが広がっている。そのためパームオイルのプランテーションや林業などに職を求めて他州からやってくる人々が多く、州の人口の約1/3が他州の出身者となっており、その割合は国内で最も高い。ニューブリテン島の中央部には褶曲山脈のホワイトマン山脈が走り、中央部から南西部は主に林業のプランテーションが散在するが、他は自給自足に近い生活をする村が点在する過疎地となっている。

歴　史

タラセアで産出される火山性の黒曜石は、石器時代にナイフや鏃、槍の穂先として重宝された。黒曜石は、長い年月を経てオセアニアの海を渡り、遠くはサモアやハワイまで伝わった文化の担い手であるラピタ人の交易品としても使われていたが、その多くがタラセア産であった事が判明している。またタラセアはシェルマネーの生産地としても知られ、国内ではカヌーを使い、ビティアス海峡を挟んでニューギニア島北岸のモロベやマダンとの間でシェルマネーや土器を交易品とするビティアス交易と呼ばれる交易が数千年前から行われていた。

19世紀末、ニューブリテン島はドイツ領ニューギニアとなったが、支配はラバウルが中心で、西ニューブリテンでは殆ど発展は無かった。

太平洋戦争時には日本軍が一時占領したが1943年から1944年にかけて連合軍による反攻でツルブ（グロスター岬）の戦い、タラセアの戦いなど激戦が繰り広げられた。特筆すべきは「ダンピール海峡

の悲劇」と呼ばれるビスマルク海海戦で、1943年3月、ラバウルから出港したレイに向かう日本軍の輸送船団がダンピール海峡付近で連合軍の攻撃によって壊滅させられ3000名以上の日本軍兵士が戦死した。

1960年代になり、政府によってオイルパームのプランテーションがホスキンスとビアラで開始された。これが西ニューブリテンのパームオイル産業の先駆けとなった。1966年にはニューブリテンが東西の州に分割され、初めて西ニューブリテンが独自の行政区分となった。

不時着した日本軍偵察機の残骸

産　業

前述の通りパーム油の生産が西ニューブリテン州最大の産業で、国内で圧倒的なシェアを誇る。またオイルパームのプランテーションで飼育される肉牛は「キンベ牛」と呼ばれ、長年市場を占めて来た豪州産肉に対抗する国内牛として期待されている。

パーム椰子の実の収穫作業

また林業による木材輸出はパプアニューギニアの中で3番目に多く、その他コプラ椰子、カカオなどの輸出も盛んである。

教育研究施設

ワリンディリゾートに併設するマホーニア・ナ・ダリ(Mahonia Na Dari)は海洋保護研究施設として国内外の海洋科学者、環境保護研究者のパプアニューギニアでの拠点のひとつとなっている。マホーニア・ナ・ダリはタラセア地方の言語で「海の守り神」の意味。

またニューブリテン・パームオイル社の研究部門としてスタートしたダミ研究所(Dami Research Station)ではオイルパームに関する生物工学、食物栽培学、環境科学などの研究を行い、プランテーションの指導などを行っている。

マホーニア・ナ・ダリでの地元民対象の勉強会

主な都市や街

キンベ（Kimbe）

州都キンベは人口3万人、パーム椰子の町として他州からの労働者が多い。

国内最大級の企業の一つニューブリテン・パームオイル社(NBPOL)がキンベ周辺に従業員8000人の広大なプランテーションを持つ他、7000以上の小規模農家から油椰子を購入している。

2002年にはNBPOL精製所が出来て国内での精製が開始され、国内生産される食用油やマーガリン、石鹸の原料とされる他、海外にも輸出されている。なおNBPOLの最大の輸出先は英国、EUであり、英国リバプールにも独自の精製所を持つ。積み出し港であるキンベ港の取扱量は国内3位である。

気候は熱帯雨林気候で最高気温は年間を通じて30度以上で蒸し暑く、年間降雨量は4000mmを超える多雨地帯である。5月から10月にかけては乾季だが1～3月は月間500mm以上の雨が降る。

州都キンベのマーケット

キンベ周辺の見どころとアクティビティ

●スキューバ・ダイビング

キンベ湾は世界的なサンゴの群生地帯で生物学的にも世界から注目されており、ダイバー憧れのスポットとなっている。リゾート・ステイの他ダイビングクルーズ船も運航されている。

スキューバ・ダイビングで楽しめるキンベの水中の美しいサンゴ群

●スポーツ・フィッシング

フィッシング設備を整えたリゾートがあり、海ではカジキやマグロ、GT（ロウニンアジ）ハマダイ（オナガ）の一種であるルビー・スナッパー、大型のフエダイであるレッド・バスなどを狙う。また川釣りではその引きの強さから「世界最強の淡水魚」とも呼ばれる「パプアン・ブラックバス」を求めて世界からアングラーが集う。

●ホットリバーツアー

地下の火山活動によって熱せられた「温泉の川」を訪れるツアー。

4WD車でプランテーションを抜けると温泉が流れ込みちょうどよい温度の川のス

ホットリバー

ポットに着く。野趣あふれるアトラクション。

●蛍の木

エフルゲンスと言う陸生の蛍は木に集まり、集団で同期明滅を繰り返す事で交尾相手を探す。パプアニューギニアではいたる所に生息するが、キンベの近くではこの蛍の木が特定されており、ワリンディリゾートなどからツアーで訪れ、「熱帯のクリスマスツリー」とも呼ばれる幻想的な生態を観察する事が可能。

ホタルの木

キンベのホテル

リアモリーフ・リゾート

Liamo Reef Resort（Tel：983-4368）

キンベ中心街の海岸沿い、キンベ・ゴルフクラブに隣接する75室のホテル。

キンベでのビジネス滞在の他、スポーツ・フィッシングのベースとしても利用される。

ホテル・ジェネシス

Hotel Genesis（Tel：983-4011）

キンベの中心街から車で5分、ニューブリテン・ハイウェイ沿いに建つ40室のビジネスホテル。

ワリンディ・プランテーション・リゾート

Walindi Plantation Resort（Tel：7234-8460）

キンベ郊外のプランテーションの中に佇む自然派リゾート。

独立した「バンガロータイプ」と長屋タイプの「プランテーションハウス」がある。

世界的に有名なダイビングに加え、野鳥観察、トレッキングなど各種アクティビティ、蛍の木やホットリバーなどへのツアーも催行する。

ワリンディ・プランテーション・リゾート

キンベの交通

キンベの空の玄関ホスキンス空港は、キンベから南東へ約40キロ、車で40分のステティン湾に面した海岸近くにある。ホスキンス空港からはニューギニア航空、

PNGエアの定期便が約１時間で首都ポートモレスビーへ飛んでいる。その他レイからラバウルへ向かう便の経由地ともなっている。

道路網では同じ島ながら長年陸路が無かった西ニューブリテン州と東ニューブリテン州を繋ぐ陸路、「ニューブリテン・ハイウェイ」が開通し、タラセアからキンベ、ホスキンス、ビアラ、ウラモナを経由して東ニューブリテン州のオープンベイまでつながる。

新しくなったホスキンス空港

東ニューブリテン州（East New Britain Province）

ニューブリテン島は長らくひとつの行政区であったが、1966年に東西に分割され、東半分がラバウルを州都とする東ニューブリテン州となった。東ニューブリテン州は火山地帯で、州北部のガゼル半島では「ラバウル・カルデラ」と呼ばれる巨大な火山クレーターが海に沈んだシンプソン湾を囲みバルカン山、カビウ山、ラバナカイア山、タラングナン山、タブルブル山などの火山群が噴火を繰り返してきた。ガゼル半島ではこれらの火山灰によってもたらされる肥沃な土壌を利用したココナッツやカカオなど商品作物の栽培が盛んである。

火山灰に埋もれ廃墟になった建物

1994年9月にバルカン山とタブルブル山が大噴火し、巨大な噴煙とともに大量の火山灰が降り注いだ。この大噴火によりラバウルの町の半分ほどが灰に埋もれ、州政府施設や企業と住民の多くは、約20km離れたココポに移り、それまで過疎地だったココポは新しい州都として急速に発展している。

ココポにあるコーヒーショップと24H営業のコンビニエンスストア

一方ラバウルのシンプソン湾は大型客船も入港できる天然の良港で、重要な物資輸出入港であるため、依然その役割を果たしている。

ラバウルのシンプソン湾

太古からラバウルを有するガゼル半島に暮らしていたのはバイニング族であったが、数世紀前にニューアイルランド島より集団で移住してきたトーライ族に追いやられて険しい山間部に移り住み、ひっそりと自給自足の生活を送ることになる。

なお「バイニング」はトーライ族のクアヌア語による複合語で「野蛮な森の住人」の意味である。

現在ではトーライ族がガゼル半島を中心に広く居住し、州の人口の2/3を占めている。トーライ族の伝統的な貨幣として知られるのがシェルマネーのタブ Tabuである。タブは直径5mm程の小さな海洋性のカタツムリの貝で、これに穴をあけ、籐のヒゴに通して束にし、それらを繋いでリング状にしたり、巨大なものはタイヤのようにして保管される。タブは大人が両手を広げた長さの単位「ポコノ」Pokonoで価値が測られ、古くからトーライ族の貨幣として広く流通し、また財産として重宝されてきた。現金としてだけでは無く、結納や葬儀の際の贈り物、いさかいの調停手段として社会的な価値をも持ち、キナとトヤと言う貨幣が法定通貨となった今でも推定で800万キナ（約3億円）相当のタブが流通していると言われており、青空市場での買い物の他、学費、法廷での支払いなどに認められる場合もあり、法定通貨と交換する「銀行」も存在している。

土産物として売られているリング状のシェルマネー

儀式での精霊ドゥクドゥク

トーライ族のもう一つのユニークな伝統は男性による「秘密結社」で、トゥブアンと言う女性の精霊と、息子とされるドゥクドゥクを崇め、独自の儀式や掟を持っている。多くは門外不出だが、毎年開催されるマスクフェスティバルでは一般人でも、これらの精霊が登場する儀式「キナバイ」を見ることが出来る。

トーライ族は西洋人との接触が早く、キリスト教や教育も広く普及していながら、タブの流通や秘密結社を継続させ、西洋文明と伝統文化を上手く調和させている点も東ニューブリテン州の大きな特徴と言えるだろう。

トーライ族の言語であるクアヌア語はココポ、ラバウルを中心として広く話されている。ピジン語はそれに次ぐ。ピジン語にはその形成過程から多くのクアヌア語が含まれており、ピジン語で「木」を意味する「ディワイ」、「卵」を意味する「キアウ」、「小さい」を意味する「リキリキ」など、多くの言葉がクアヌア語を語源とする。

バイニング族のファイヤーダンス

一方、先住民族であるバイニング族で一番有名なのはその民族舞踊で「ファイアーダンス」と呼ばれる。鳥や動物を模した独特の大きな仮面を被り、リズムに合わせて踊りながら火の回りを廻り、火の中にジャンプしていく。勇壮でダイナミックな踊りは彼らの民族的地位に反して東ニューブリテン州の代表的な踊りとなっており、州旗のデザインにも使われている。

また州南部のポミオ地区は急峻なナカナイ山脈が走り、年間降雨量6500㎜以上と多雨な気候で、土壌も悪く交通も不便なため、産業は木材伐採があるのみとなっている。

歴　史

考古学的発見から、少なくとも1万2千年前にはニューブリテン島に人類が居住していたと考えられおり、ワトム島では土器やタラセア半島を起源とする黒曜石などと共にラピタ文化の担い手であった人々の遺骨が発見されており、約2500年にこの地にラピタ人が居住していた証拠となっている。

ニューブリテン島の名は1700年にウイリアム･ダンピールがこの海域を航海し、ニューギニア島との間の海峡をダンピール海峡とし、新しく発見したこの島をラテン語でノバ・ブリタニア（Nova Britannia＝英語でNew Britain）と名付けたのが由来である。

1884年、ドイツがニューギニア島の東半分とニューブリテン諸島を植民地化する事を宣誓し、ドイツ領ニューギニアとなった。マヌス、ニューブリテン、ニューアイルランドを含むこの島しょ部一帯は「ビスマルク諸島」と名つけられ、ニューブリテン島はノイ・ポンメルン（Neu-Pommern　新しいポメラニア）というドイツ語風の名に改名された。

ホテル敷地内に保存されるクイーンエマの屋敷跡の階段

ドイツ統治時代を象徴するのが実業家のエマ・フォーサイスである。アメリカとサモアの血を引くエマは1878年にデューク・オブ・ヨーク諸島のミオコ島に居を構えてコプラの貿易を始めたが、やがてガゼル半島の土地を購入してコプラのプランテーション経営で利を上げ、ニューブリテン島だけでは無く、ニューアイルランド島やブーゲンビル島も含む6万ヘクタールものプランテーションを所有する大富豪となった。ココポの海岸沿いのラルムに建てた屋敷では贅を尽くした社交パーティーが催され、その派手な生活ぶりも含めて「女王エマ (Queen Emma)」と呼ばれた。

1914年7月に第一次世界大戦が始まると、9月11日にはオーストラリア軍がコ

コポ近くのビタパカ村にあったドイツ軍の無線基地局をターゲットとして上陸攻撃をし、これを奪取した（「ビタパカの戦い」）。現在ビタパカには英連邦の「ラバウル戦争墓地」があり、その一角にビタパカの戦いの記念碑も建てられている。

太平洋戦争では1942年1月に日本軍がラバウルを占領し、太平洋方面の拠点「南方方面司令部」としてガゼル半島一帯に大軍事基地を展開し、最大時で陸海軍を合わせ10万人近い将兵が駐屯していた。ゼロ戦など戦闘機用の「東飛行場」（ラクナイ）、一式陸攻など大型機用の「西飛行場」（ブナカナウ）の他、「南飛行場」（ココポ）、「北飛行場」（ケラバット）４つの空港を整備した。因みに東飛行場は戦後ラバウル空港として整備され1994年の火山噴火まで使用されていた。この大航空兵力が「ラバウル航空隊」でガダルカナルやポートモレスビー方面に頻繁に出撃していた。激励のために訪れた連合艦隊、山本五十六司令長官はこの基地を飛び立った後、ブーゲンビル島上空で連合軍に撃墜され戦死された。

旧ラバウル空港かつての日本軍東飛行場わきに残る日本軍機の残骸

ココポ～ラバウルにかけて随所にあるトンネル群、これは第13兵站病院と思われる

その後の戦況悪化に伴い補給線を絶たれたラバウル基地の戦力は衰え、度重なる爆撃から生き延びるためトンネル基地を掘り続け、農地を開墾し、多くの将兵が終戦まで自給自足して生き延びた。そのトンネルの総延長は580Kmにも及ぶと言われている。

産　業

1950年代、オーストラリア政府の役人によって「トーライ・カカオ・プロジェクト」が開始されココアの栽培が導入、奨励された。これがきっかけとなり、現在までカカオはコプラと共に東ニューブリテン州の経済を支える商品作物である。

カカオでは国内最大の生産者であり輸出企業であるココポに本社を置くアグマーク社(NGIP-Agmark)がある。

また木材の輸出も多く、州西部のオープンベイでは日系企業であるオープンベイ・ティンバー社が1971年から事業を行い、現在では3万ヘクタールもの大規模な植林事業を行って、持続的な林業ビジネスを営

コプラの原料のココ椰子の下にカカオが栽培されるプランテーション

んでいる。

さらにケレバットや南部のポミオでは近年パームオイルの栽培も増えている。

椰子の生い茂るジャングルに活火山という魅力的な風景、美しい海そして歴史遺産もあり、ラバウルには昔から多くの観光客が訪れていたが、近年は特に大型クルーズ客船の寄港が多く、2018年ベースで年間12隻，14,348名が訪れ、大きな観光収入となっている。

教育研究機関

1965年に設立されたブダル農業大学は2009年にパプアニューギニア天然資源環境大学Papua New Guinea University of Natural Resources and Environment（UNRE）となった。天然資源の持続的利用を目的とし、熱帯農業、畜産、海洋資源管理、林業、観光学などの学部を持つ。

また1987年にココポの内陸部ワランゴイ川沿いにラバウル・エコテック研修センターをオープンした日本のNGOオイスカは、以来、畜産、稲作、野菜栽培や環境保全のための植林プロジェクトなどの研修を通じて青少年育成を続ける。

主な都市や街

ラバウル（Rabaul）

火山のカルデラによって形成された天然の良港に目を付けたドイツが湿地帯を埋め立て造成した街がラバウルである。ドイツ風の整然と区画整理された街並みであったというこの街はコプラの積み出し港として大型船が入港し、1910年からはドイツニューギニアの首都として栄え、当時はシンプソンス・ハーフェンと呼ばれていた。

なお、ラバウルの名前の由来は、ラバ・バウル＝「大きな湿地帯」と言う現地語が訛って「ラバウル」となったという説が有

ラバウルの天然の良港シンプソン湾

力である。

1937年タブルブル山とバルカン火山のダブル噴火で麓のマチュピット島を中心に507名の死者を出した。この惨事の中から最初に芽を出して花を咲かせたのがフランジパニ（プルメリア）であった。灰の中から立ち上がる姿がラバウルの人々を勇気づけ、ラバウルを象徴する花となった事から、ラバウルは「フランジパニ・タウン」と呼ばれ、毎年9月には「フランジパニ・フェスティバル」も行われている。

1994年の噴火前にはその風光明媚な景観と治安の良さから多くの外国人も住み、人口は1万7千人ほどであったが、多くの人がラバウルを去り、現在の住民は4000人ほどである。しかし太平洋戦争の戦跡の多くや慰霊碑があり、大型船が発着できる港があるため、今でも観光地として多くの観光客を受け入れている。

年間を通じて最高気温は30度を超える熱帯雨林気候で年間降水量は約2000mm、5月から10月は乾季となる。

ラバウルのホテル

ラバウルホテル

Rabaul Hotel（Tel：982-1999）

旧ラバウル市街の中心近くに位置し、1994年の噴火を生き延び現在も営業を続ける老舗ホテル。

クラウロッジ

Kulau Lodge Beach Resort（Tel：7246 6892）

ラバウルの北、タリリ湾に面するビーチに建つロッジ。

アットホームな雰囲気で食事が美味しいと評判。

ココポ（Kokopo）

現在の州都ココポは、19世紀後半ドイツニューギニア時代には当時ハーバスホーへと名付けられた首都だったが、後に天然の良港があるラバウルに拠点が移ってしまい、火山噴火で州都がラバウルからココポに移るまでは雑貨商店が数件あるだけの小さな町であった。

1994年のラバウルの火山噴火直後は海岸沿いにプレハブ小屋が立ち並ぶ急造の町であったが、徐々に発展を遂げ、現在は州政府機能、銀行、ホテルなど都市機能の整った街として発展を続けている。人口は約2万人、年間を通じて最高気温は30度を超える熱帯雨林気候で年間降水量は約2000mm、5月から10月は乾季となる。

銀行ATMも設置された近代的なココポマーケット

ココポのホテル

ココポビーチバンガロー・リゾート

Kokopo Beach Bungalow Resort（Tel：982-8788）

ココポの中心の海岸沿いに建つホテル。

ココポビーチバンガロー・リゾート

ブランチ湾を見渡すデッキがあるレストランでは食事は中華、洋食、インド料理が楽しめる。ツアーも充実し、戦跡観光、慰霊、マリンスポーツ、ビジネスステイに最適。

ガゼルインターナショナルホテル

Gazelle International Hotel（Tel：982-5600）

エアウエイズ・ホテルグループの高級ビジネスホテル。ナイトクラブやスロットマシーンもあり、エンターテインメントも充実。

近代的な設備のガゼルインターナシナルホテル

ラポポ・プランテーション・リゾート

Rapopo Plantation Resort（Tel：982-9489）

トクア空港に近いビーチに建つリゾート。街の喧騒から離れリラックスしたり、ダイビングを楽しむ観光客も多い。

周辺の見どころ、アクティビティ、イベント

●スキューバ・ダイビング

シンプソン湾を中心に、太平洋戦争中に沈んだ艦船や航空機がレック・ダイビングのスポットとなっている。デューク･オブ･ヨーク諸島方面にはハードコーラルの美しいポイントや、ジュゴンの生息するポイントもありポテンシャルは高い。

海に眠る日本軍機

南太平洋戦没者の碑

Japanese Peace Memorial

シンプソン湾を見下ろすナマヌラの丘に建つ日本政府の慰霊碑。

南太平洋の諸島及び海域で戦没した人々をしのび平和への思いを込めて1980年に日本とパプアニューギニア政府により建立されたこの慰霊碑の天井には、南太平洋の地図が描かれ、ラバウルの場所に穴が開

いている。この穴を通して、太陽の陽が差し込み、大地に眠る死者と、そこを訪れる人が巡り会う場所を意味している。

南太平洋戦没者の碑

南東方面艦隊前線指揮所跡（通称「ヤマモトバンカー」）

Admiral Bunker

1943年4月に前線視察でこの地を訪れた後、ブーゲンビル島のブイン近くで撃墜された山本五十六連合艦隊司令長官にちなんで「山本バンカー」と呼ばれる地下壕。内部の壁や天井には作戦会議に使用したであろう地図が残っている。向かいにはかつての社交クラブで戦時中は日本軍が接収した「ニューギニア・クラブ」が歴史資料館となっている。ここではドイツ植民地時代から太平洋戦争を含む遺物や写真が展示さ

ヤマモトバンカー

ヤマモトバンカーに描かれた地図

れている。

ココポ博物館

Kokopo Museum

ココポの市街地近く、ゴルフ場に隣接する海岸近くにある州立の博物館で州の観光局も兼ねる。屋内には戦争の遺品の他、バイニング族のマスクやドイツ植民地時代の絵画などが展示され、屋外では高射砲やゼロ戦を見ることができる。

ココポ博物館

大発洞窟

Japanese Barge Tunnel

ココポとラバウルの間のカラビア湾に日本陸軍の上陸艇である「大発」（「大型発動機艇」の略）が格納されていた洞窟。全部で7つの格納洞窟があったが現在大発艇が残っているのは1つだけで、後はバスを待

大発洞窟

つ人が日除けに使われている。

この洞窟には縦列に4艇が格納されており、中は暗いので見学には懐中電灯が必要。

ラルム・カントリークラブ

Ralum Country Club

ココポにある社交クラブ。9ホールのゴルフコース、スヌーカー、スカッシュコートなどがあり、メンバーによるイベントなどが行われる。レストランの中華料理は評判が高い。

ラルム・カントリークラブ

マスクフェスティバル

The National Mask & Warwagira Festival

毎年7月上旬に行われる、東ニューブリテン州や周辺の仮面文化を中心とした部族の祭典。トーライ族の儀式「キナバイ」、バイニング族の「ファイアーダンス」を始

様々なマスクの民族衣装が登場するマスクフェスティバル

めとしたユニークな仮面の部族が結集し、それを目当てに世界から観光客が集まる一大イベント。

●ココポとラバウルの交通

ココポとラバウルの空の玄関口ラバウル（トクア）空港は、ココポから車で20分、ガゼル半島の海岸近くにある。ニューギニア航空、PNGエアが首都ポートモレスビー（所要1時間20分）の他、ホスキンス、ケビエン、ブカ、キエタへ定期便を就航させている。またポミオのジャキノット・ベイ空港へは林業関係者用の定期チャーターがラバウルとの間を往復している。

陸路ではラバウル・ココポを中心としてガゼル半島に道路網が広がっている。

ラバウル（トクア）空港

ココポからラバウルは車で約40分ほど。州西部のオープンベイへはニューブリテン・ハイウェイが完成し西ニューブリテン州と陸路で繋がった。一方、州南部への陸路は無く、ボートか空路に限られる。

ニューアイルランド州（New Ireland Province）

ニューアイルランド州はビスマルク諸島の東端に位置し、ニューアイルランド島の他、150近い島々が南緯2度から5度にわたって広がる島嶼州である。
ニューアイルランド島は全長350キロにわたる細長い島で、最も狭い場所では幅5kmほどしかない。ナマタナイより南部はハンス・メイヤー山脈がそびえ、タロン山(2340m)をはじめ急峻な地形となり、林業のキャンプ地が散在するが、住民が少ない過疎地となっている。西はセントジョージ海峡を挟んでニューブリテン島が間近に浮かぶ。

歴　史

少なくとも3万年前にはすでにニューアイルランド島に人類が居住していた痕跡が認められており、エメラウ島、ムサウ島など、ニューアイルランド島周辺の島々では3,000年以上前のラピタ土器の発掘があり、隣接するニューブリテン島を含め、この地域が初期のラピタ文化の重要な一部を担っていたであろうことが推測されている。

また19世紀にはいると欧米の捕鯨船が水や薪の補給のために頻繁に立ち寄っていた。アメリカの捕鯨船に乗り込んだジョン万次郎も1847年代にニューアイルランド島に寄港した記録がある。

州都ケビエンの浜辺の市場

19世紀末、ドイツ領ニューギニアとなったニューアイルランドはドイツ語でノイ・メケレンベルグ（Neumecklenburg）と名付けられた。この時代に行政長官として赴任したフランツ・ブルミンスキは東海岸の各地区の住民を使って道路を建設させた。この海岸道路は後に「ブルミンスキ・ハイウェイ」と呼ばれ、ココナッツのプランテーションと共に、現在まで残るドイツニューギニアの功績である。1942年1月、太平洋戦争開戦とともに旧日本軍が侵攻し終戦まで占領した。

州都ケビエン中心街にある日本軍の大砲

産　業

伝統的にはコプラ、カカオなどの農業作物の栽培、林業と沿岸漁業がニューアイルランドの産業であったが、1993年にポリアンバ社(Poliamba Ltd)がパームオイルの生産を開始した。さらに1990年代後半以降、金鉱が発見されニューアイルランドの経済を一変させた。現在ではタバール諸島のシンベリ島にあるシンベリ金鉱山(Simberi Gold Mine)と、リヒル島のニュークレスト・リヒル鉱山(Lihir Mine)で採鉱が行われおり、国の大きな収入源となっている。

教育研究施設

州都ケビエンの国立水産大学(National Fisheries College)はパプアニューギニアで唯一の漁業庁管轄の漁業教育・訓練機関となっている。

主な都市や街

ケビエン（Kavieng）

ニューアイルランド島の北端の州都で人口2万人。空港、港湾施設、スーパーマーケット、銀行、病院、ゴルフクラブなどがあるニューアイルランド州の中で唯一の町といえる。海岸沿いのマーケットでは魚やマッドクラブ、ロブスターなど地元で獲れた豊富な海産物を買うことが出来る。

ケビエン中心街のスーパーマーケット

ケビエンは熱帯雨林気候で最高気温は年間を通じて30度以上で蒸し暑く、年間降雨量は3000mmを超える。5～11月が乾季で、12～4月は300mm/月以上の雨が降る雨季である。

ケビエン周辺の見どころ、アクティビティ

●スキューバ・ダイビング

太平洋とビスマルク海を繋ぐ海峡を抜ける回遊魚や群れと遭遇するダイビングが素晴らしく、太平洋戦争でのレック（沈船、飛行機）も楽しめる。現在はダイビングリゾートの「リセナン･アイランドリゾート」とケビエンの街中にあるダイビングショップ、「スクーバベンチャーズ」の2か所でダイビングが出来る。

ケビエン町中のダイビングショップ、スクーバベンチャーズ

●サーフィン

11～4月のモンスーンシーズンには北西のフィリピン沖からのうねりが到達して、各所にサーフィンに適した波が立つ。ボートに乗ってリーフを巡るスタイルが標準的だが各リーフには地主（リーフオーナー）がいて、入海料金を支払う必要があり、個人で入るとトラブルになるケースがあるので、サーフィンリゾートを利用する事が望ましい。

サーフィン

●サイクリング

ニューアイルランド島を縦断するサイクリングは、1990年代にメルボルンの学校が州政府観光局の協力を得て始められたもので、今も旅行会社を通じてこうしたツーリングをアレンジすることが可能だ。40Km－6 0Kmごとにあるゲストハウスに宿泊しながらケビエンからナマタナイまでつながる舗装された海岸道路265kmをサイクリング。コースも全区間だけでなく自分の体力や日程に応じて決められる。

ケビエンの宿泊

ケビエン・ビレッジ・リゾート

Kavieng Village Resort（Tel：984-2526）

ケビエンの空港滑走路の近く、街から少し離れた海岸沿いにあるロッジで、部屋が広く快適。

ケビエン・ビレッジ・リゾート

ケビエン・ホテル

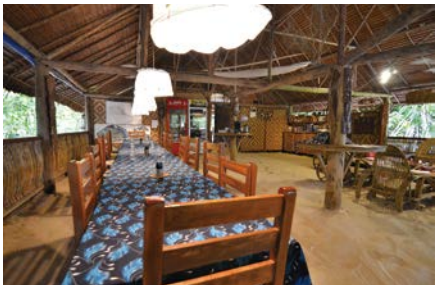
Kavieng Hotel（Tel：984-5128）

ケビエンの中心街、州政府や銀行などがあるコロネーション・ドライブ沿いに建つ老舗のビジネスホテル。金曜のシーフード・ビュッフェの夕食が人気。

リセナン・アイランド・リゾート

Lissenung Island Resort（Tel：7234-5834）

ケビエンからボートで20分の小さな島



リセナン・アイランド・リゾート

にある一島リゾート。

ヨーロッパの民宿のような雰囲気でダイビングを中心にマリンリゾートに最適。

ヌサ・アイランド・リトリート

Nusa Island Retreat（Tel：7234-5834）

ケビエンから海峡を隔てた目の前にある小さな島にあるリゾート。

11月から3月はオーストラリア人を中心にサーファーで部屋が埋まるので早めの予約が必要。

ヌサ・アイランド・リトリート

ケビエンの交通

首都ポートモレスビーからケビエン空港へはニューギニア航空、PNGエアが定期便を持ちラバウルやマヌスなどの経由便もある。ケビエン以外の空路は金鉱山のあるリヒル島ロンドロビット空港(Londolovit Airport)へ国内定期便の他、オーストラリアのケアンズから鉱山会社によるチャーター便もしばしば運航されている。

ケビエン空港

ニューアイルランド島東岸にはドイツ領時代に造られた全長265kmの舗装路「ブルミンスキ・ハイウェイ」が、州都ケビエンから中南部の町ナマタナイまで通じている。

マヌス州（Manus Province）

マヌス州はパプアニューギニアの最北端に位置し、200以上の島からなる島しょ州で、800kmにわたって赤道に面し、面積・人口の面で国内最小の州である。

その中でマヌス最大の財産は高い教育を受けた優秀な人材で、ポートモレスビーや他の町で仕事をし、故郷に仕送りをしている。中央政府の官僚もマヌス出身者は人口比からすると他州よりも遥かに高い。マヌスの就学率は国内トップ、識字率でもNCDに次いで2番目という高さである。

儀式用の割れ目太鼓である「ガラムート」が奏でる16ビートのリズムに乗って軽快なステップを踏んで踊るマヌスの伝統的な踊りは「マヌス･ダンス」と呼ばれ、パプアニューギニアの数ある民族舞踊の中でも個性的で有名である。

マヌス州の美しい海

ガラムートで踊る子供

歴　史

1884年にドイツ領ニューギニアの一部となったマヌスは第一次世界大戦後、オーストラリアによる委任統治領であるニューギニアの一部となった。太平洋戦争では日本軍が占領したが1944年にマッカーサー元帥に率いられた連合軍が奪回、マヌス島に隣接するロス・ネグロス島のシーアドラー湾に港湾設備や飛行場を含む基地を建設した。連合軍はここからニューギニア島の戦いやフィリピンへの反攻を開始した。この基地は戦後オーストラリア海軍の基地となり、後パプアニューギニアの独立に伴って同国軍ロンブルン海軍基地となった。

日本政府の慰霊碑

太平洋戦争時、マヌスの島民の多くが外国人に接していたことがきっかけで、教育を受ける島民性が育まれた結果、多くの優秀な人材を輩出する島となっていったことは特筆される。

2001年には、難民に偽装してオーストラリアへ押し寄せる不法入国者や密航者を南太平洋諸国に受け入れさせ、見返りとして経済援助を行うという「パシフィック・ソリューション」の一環としてロンブルン海軍基地の一部がオーストラリアの難民収容センターとなった。

難民を囚人のように扱ったオーストラリアがその政策を非人道的と国際的に非難される中、センターは閉鎖、再開を繰り返したうえ、数百名の難民を残したまま2016年に閉鎖された。

産　業

コプラ椰子、カカオ、バニラなどの商品作物が作られる程度で、殆どの島民は小規模沿岸漁業を中心とし自給自足に近い生活を送っている。

主な都市や街

ロレンガウ（Lorengau）

ロレンガウはマヌス州の州都で人口約6000人、州政府の建物、商店にローカルマーケットが並ぶだけの小さな街。新鮮な魚や野菜の他、タコの燻製や、ワシントン条約で輸出が禁止れているミドリガイの貝殻などマヌスらしい交易品が売買されている。

商店の入る建物

ローカルマーケット

ロンブルン海軍基地のオーストラリア難民収容センターが閉鎖された後、取り残された難民の為にロレンガウの一角にセンターが建てられて暮らしている。

ロレンガウの気候は熱帯雨林気候で年間降雨量は3500mmを超える。

最高気温は年間を通じて30度を超えるが木陰では風が通り涼しく感じる。

ロレンガウのホテル

ロレンガウ・ハーバーサイド・ホテル

Lorengau Harbourside Hotel（Tel：973-9093）

州都ロレンガウの街の中心部の海岸沿いに建つホテル。

ビジネス客が中心だが、慰霊団など観光客の利用もある。

ロレンガウ・ハーバーサイド・ホテル

モモテ空港

ロレンガウへの交通

ロレンガウの空港となるロス・ネグロス島のモモテ空港にニューギニア航空の定期便が発着する。

首都ポートモレスビーへは、レイ、マダンやケビエンなどを経由する便が多い。

モモテ空港から州都ロレンガウまでは車で約15分。

ブーゲンビル自治州（Autonomous Region of Bougainville）

空港のあるブカ島と対岸のブーゲンビル島

ブーゲンビル自治州（以前の北ソロモン州）はパプアニューギニア東端海域に位置し、ブカ島とブーゲンビル島の他、160以上の小さな島々からなる。

パプアニューギニア独立前からのパングナ銅鉱山の繁栄、長い内戦を経て和解、自治へと向かい、今後ブーゲンビル州は独立国となる方向が決まった。

政治的にはパプアニューギニアの国家としての政治システム（知事と各選挙区選出の３名の国会議員）とは別に、州の憲法を持ち、大統領、議長の下に39名の自治州議員で構成する「国会」を持つ自治州独自のシステムが共存する。

地理的にはブーゲンビル島は隣国、ソロモン諸島の諸島群の最西端にして最大の島であり、1768年、世界一周の航海中にフランス人探検家のルイ・ド・ブーゲンビルが発見した事から、ブーゲンビル島と名付けられた。

文化面では、竹の筒で作ったパイプドラムでビートを奏で、歌いながらリズミカルに踊る「ブカ・バンブー・ダンス」が全国的に有名である。

歴　史

他州の多くと同様、19世紀後半のドイツ領時代から第一次世界大戦後のオーストラリアによる委任統治領を経て太平洋戦争では旧日本軍が占領したが、1943年11月には旧連合軍によるタロキナ上陸作戦など終戦まで激しい闘いが繰り広げられた場所である。

パプアニューギニア独立前の1972年から操業を開始したパングナ鉱山は当時、世界最大の銅の産出量を誇り、独立後はGDPの40%以上を占める国の主幹産業であった。

しかし環境破壊からオオコウモリなどが絶滅したり、公害により多くの奇形児が生まれた上に、アパルトヘイトのような人種差別問題も浮き彫りにされ、待遇に不満を

キエタに展示されている日本軍機

もつ層が指導者フランシス・オナを中心として立ち上がり、パングナ鉱山は操業停止に追い込まれた。

オナを中心とする反抗勢力は自らをブーゲンビル革命軍(BRA)と称し、鉱山関係者以外からも広い支持を得て、政府に対しブーゲンビルの国としての独立を要求し、外国人や他州からの労働者を追い出した。

これに対しパプアニューギニア政府が軍隊を投入して武力解決を図った結果、内戦状態となり、政府軍に協力するブーゲンビル・レジスタンス軍(BRF) というグループも出現して、州民を二分する内戦が10年余り続けられた。

1998年にようやく休戦条約が交わされ、武器の放棄、自治政府の設置、さらに国としての独立を決める州民投票を行うこと等を取り決めた平和協定が2001年に成立・発効した。

この独立の是非を問う州民投票は、2019年11月、他州や他国に在住する州民も投票権を得て実施され、97%という圧倒的な得票率で独立賛成派が圧勝した。この結果により今後、パプアニューギニアからの分離独立が具体的に進められていく予定である。

産　業

パングナ鉱山の操業停止後の州の主な産業としてはコプラやカカオの農作物生産で、多くの州民は自給自足に近い小作農業や漁で生活をしている。

主な都市や街

アラワ（Arawa）

アラワは内戦以前、北ソロモン州の州都として、そしてパングナ鉱山の街、積み出し港として大きく栄え、最大時で数万人の外国人労働者が居住していたが、内戦勃発で街はほとんど焼き尽くされてしまい、見る影もなくなった。

2000年代後半になって徐々に復興を始めてビジネスが戻りだしインフラも着実に改善しつつある。近隣のキエタ沖のポクポク島にサーフィン用のリゾートが開設したが、さらなるインフラ整備に伴い、文化・歴史・自然の資源を生かした観光客誘致にも期待がかかる。

アラワのホテル

プーナン・ナバ・イン

Poonang Nava Inn（Tel：7959-2864）

アラワの市街近くに建つロッジ。アロパ空港から車で20分。

快適な「デラックス・ルーム」と共同トイレ・シャワーだがリーズナブルな「スタ

プーナン・ナバ・イン

ンダード・ルーム」がある。フレンドリーなスタッフに加え、食事が美味しいと評判。

ブカ（Buka）

ブーゲンビル島の北端からブカ海峡を隔てた島がブカ島で州都ブカがある。内戦前はブーゲンビル島中南部が経済・行政の中心地で、ブカは小さな町のひとつに過ぎなかったが、主にブーゲンビル島内で戦闘が行われていたため島から海峡を隔てたブカ島に急きょ滑走路と町が整備された。

空港、自治州政府の建物、銀行、郵便局、港湾施設、スーパーマーケットに簡素な宿泊施設が数件建つのみの小さな街。マーケットでは海産物や農産物の他、ブカ名産の巨大なビートルナッツ（ブカブアイ）や全国的にブカ・バスケットとして知られる州南部のシワイ村特産の手編みのバスケットなどが売られている。

ブカのホテル

リンチャーホテル

Lynchar Hotel（Tel：7237-6571）

ブカ海峡に面する海岸近くに建つロッジ本館と新館であるシーサイドウイングを含めて34室。慰霊団や遺骨収集の拠点として利用される事が多い。

アラワとブカの交通

アラワから車で約20分のアロパ空港は、内戦前は国際空港としてソロモンへの定期便が発着していたが、内戦勃発後パプアニューギニア政府軍が滑走路を破壊して

アロパ空港

使用不能となっていた。しかし2000年以降、ビジネスが徐々に再開されるに伴い再整備され、現在ではニューギニア航空、PNGエアがポートモレスビーからの定期便を就航させ一部ラバウル経由便もある。

ブカへもポートモレスビーからニューギニア航空とＰＮＧエアが就航しており、ブカ島から対岸のブーゲンビル島ココパウまで船外機付きのボートで5分。車両もポンツーンと呼ばれる小型フェリーで渡ることが出来る。ココパウからブーゲンビル島の中心街アラワまでは車で約4時間かかる。

関係先リスト

大使館

● 在パプアニューギニア日本国大使館
Godwit Road, Port Moresby, Papua New Guinea
(P.O. Box 1040, Port Moresby 121)
TEL: (675) 321-1800，321-1483，321-1305　　FAX: (675) 323-0153
URL: https://www.png.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.htm

● 駐日パプアニューギニア大使館
〒153-0064　東京都目黒区下目黒5丁目32-20
TEL: 03-3710-7001

貿易・投資コンタクト先

● 投資促進庁　Investment Promotion Authority
P.O Box 5053, Boroko 111, Port Moresby, National Capital District、Papua New Guinea
TEL: (675) 321 3900, (675) 321 7311　　FAX: (675) 320 2237
URL: http://www.ipa.gov.pg

観光コンタクト先

● ニューギニア航空（GSA 株式会社アルコネット）
〒105-0013　東京都港区浜松町1丁目22－1 ヨシミ ビル3F
TEL: 03-5733-7109　　FAX: 03-5733-2568
E-mail: info@airniugini.co.jp
営業時間：月曜～金曜 9:30 ～ 18:00（土曜・日曜・祝祭日は除く）

● Papua New Guinea Tourism Authority (パプアニューギニア観光局)
URL: https://www.papuanewguinea.travel/

● ㈲ PNGジャパン
〒102-0073　東京都千代田区九段北1-7-3　九段岡澤ビル1階
TEL: 03-5226-7731　　FAX: 03-5226-7669
URL: https://png-japan.co.jp/

● PNG Japan Ltd. (PNG)
Car Park Shop, Gateway Hotel, Morea Tobo Road, 7 Mile, Port Moresby (PO Box 2753 Boroko, NCD)
TEL: +675-323-2103/1321/5131　　FAX: +675-327-8128
E-mail: pngjapan.pom001@gmail.com
日本での連絡先：㈲ PNGジャパン　（上記参照）

その他

● NPO法人　日本・パプアニューギニア協会
〒103-0021　東京都中央区日本橋石町3-2-12　社会保険労務士会館9階
日本ビジネスライン株式会社内
TEL: 03-5216-3555　　FAX: 03-5216-3556

最後に、今回PNGガイドブック改訂で大変お世話になったPNG Japan Ltd.（パプアニューギニア）の紹介を少し！ 皆様がPNGに仕事や観光で訪れる際は、ぜひオフィスに立ち寄ってみてください。

2000年設立のリムジン＆ツアーサービス会社で、首都ポートモレスビーと高原の町ゴロカに事務所を展開し、駐在歴の長い日本人マネージャーと経験豊富な現地人スタッフによって運営されています。

リムジン部門ではSUV、ワゴン、4WDの各種車両と熟練ドライバーを有し、短期出張から駐在事務所・各種プロジェクトとの長期契約まで対応しています。またPNG全土のホテル、航空券等の旅行手配やアポイントメントサービス、通訳・ガイドサービスなど様々な現地情報に基づいた安全で信頼おけるサービス提供しています。

写真・情報提供、記事校閲にご協力いただいた方（敬省略）
Special Thanks to: ㈲ PNGジャパン ＆ PNG Japan Ltd. (PNG)

パプアニューギニア

発行日：2020年8月31日　　改訂版発行
発　行：国際機関 太平洋諸島センター
〒101-0052
東京都千代田区神田小川町3-22-14
明治大学　紫紺館1階
電　話：03-5259-8419　　FAX：03-5259-8429
URL：https://pic.or.jp/

Printed in Japan　無断での複写・複製はお断りします。

PAPUANEWGUINEA

国際機関
太平洋諸島センター
International Organisation Pacific Islands Centre (PIC)

〒101-0052
東京都千代田区神田小川町3-22-14　明治大学　紫紺館1階
Tel: 03-5259-8419／Fax: 03-5259-8429
https://www.pic.or.jp　E-mail: info@pic.or.jp

表紙写真：メケオ族（セントラル州）
写真提供: South Pacific Tourism Organisation (©SPTO)